

エルフと復讐者の旅

月野鹿之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第四紀201年。

内戦の混乱にあるスカイリムの地に、一人のノルドの男が帰ってきた。

男にはある目的があった。

幼い頃、両親を惨殺した謎の戦士を討ち果たし、その仇を取らねばならないのだ。

誰に強制された訳ではない。

両親を愛してやまぬからでもない。

そうしなければ、同じようにしてやらねば、自身の腹の虫が収まらぬからだ。

その一方で、あるエルフの少女もまた、スカイリムの地を踏んでいた。

少女には目的はなかった。

ただ強制され、鎖に繋がれ、そこに運ばれてきただけだ。

しかし、少女の瞳は確かな意志の力を湛え、機会を待っていた。

神々の策謀、国々の思惑、様々なものが絡み合うスカイリムの地で、

出自も、種族も、性別も、何もかもが違う二人は出会う。

――

クロスオーバー無しの大長編？二次創作SSです。

まだプロトタイプで、不定期な更新になると思っています。

色々固まれば定期更新に切り替えようと思っています。

スカイリム本編開始（アルドウィン襲来）の半年ほど前から物語は始まります。

できるだけ設定に準拠したいとは思いますが、独自の解釈やオリジナルキャラクターがいたり、原作と違うところが少なからずあると思っています。

そういったものが苦手な方はブラウザバックを。

できるだけスカイリムを知らない人にも読んでもらえるように頑張ります。

※とりあえず再開しました。明日は最新話を出しますが、他が忙しいため、結局不定

期の連載になると思いますが、エタることはないと思います。

目次

第一章 旅の始まり	
プロローグ	1
第1話「北の街」	5
第2話「酒場の噂」	15
※世界観の紹介1「世界について1」	28
第3話「脱走」	37
第4話「出会い」	54
第5話「支度」	73
第6話「スカイバウンド監視所」	85
第7話「事情」	103
※世界観の紹介2「神々と種族」	117
第8話「リバーウッド」	146
第9話「夜襲」	159
※世界観の紹介3「『塔』と『石』、そして『踊り』」	181

第一章 旅の始まり

プロローグ

空を覆う闇、ヒビ割れた大地、燃え上がる木々。押し寄せる異形の大群、迎え打つ戦士たち。戦場には火の雨が降り注ぎ全てを焼き尽くす。

戦場には血と、炎に焼かれた死体の匂いが立ち込めていた。まるで地獄が、魔王メエルーンズの領域デッドランドがこの世に溢れたかのような光景がそこには広がっていた。

——ッ！

異形の軍勢の奥に鎮座する「竜」。

大きい。山のように。まるで世界を覆うように。

——ッ！

竜は叫ぶ。その度に火の雨は勢いを増していく。その咆哮は怒りの叫びであり、苦しみの唸りでもあった。

竜が齎す破壊は全てに平等であった。異形達も、それと剣を交える戦士達も、皆無惨

に倒れていった。

そんな中、苦しむ竜の下へ、ある男と女が辿り着いていた。

そう、二人は終わらせるのだ。この戦いを。長い長い旅の全てを。

二人の手は固く握られていた。

少しだけ言葉を交わすと、二人は互いに微笑んだ。

その瞬間、二人を中心に光が溢れ、戦士達が、異形達が、竜が、戦場が……いや、世界の全てが光に包まれ白に染まっていった。

無垢な光の中、竜の叫びだけが虚しく響く。

そして、それより世界は永き眠りについた。

これは記録。

ある書に記された、ある者が見てきた記憶の記録。

砕けた創造が太古より紡ぐ、星霜の輝き。

だが、この記録が記されたページを開くことは、決して誰にも叶わない。

タムリエル大陸。

原初の神々が創り出したと言われるこの定命の世界ムンダス。そして惑星ニルン。

そのニルンに存在する最も大きい大陸をタムリエルと人は呼ぶ。

タムリエル大陸は大きく分けて9つの地方に別れている。

シロデール。

サマーセツト諸島。

ハンマーフェル。

ハイロツク。

モロウインド。

エルスウエア。

ヴァレンウツド。

ブラックマーシユ。

そしてスカイリム。

これらの地方にはそこ特有の人種、種族達が暮らしている。中には人ならざる者達、

俗に言う亜人種達が主に暮らす地域も多く存在する。

もちろんこの多様性に見合う多種多様な文化がそれぞれにある。その違いは時に彼らを対立させ、多くの国が勃興し、滅び、そして歴史を紡いできた。

そんな闘争の末に、現在のタムリエルには2つの大きな勢力によつて二分されていた。

人間たちの『帝国』。そしてエルフ達の『アルドメリ自治領』。

帝国領シロディール地方北部ジエラール山脈、その中腹に位置する街「ブルーマ」。
この街の小さな宿から、物語は始まる。

第1話「北の街」

第1話「北の街」

「もう行つちまうのかい?」

ブルーマの街のとある宿屋。

「もう少しゆっくりしてたらどうだい? 冬のを越えるには体力がいるぞ?」

宿の主人に誰かが引き止められていた。

「少しくらい飯に色をつけてやっても良い」

「……長居はする主義じゃない」

大柄な男はドアに手をかけたまま、ぶつきらぼうに返答した。

男は短く刈り込んだ黒髪に、この国では少し珍しい鳶色の目をしていた。羽織っている外套の上からでも、その肉体がよく鍛えられていることがわかる。また外套の隙間から鋼鉄と黒檀鉦の重鎧が鈍い光沢を見せていた。暗色中心の装いとその大柄な身体は、まるで大熊のような異質な威圧感を放っている。

さらに外套の下には短剣に小弓にと、ジャラジャラと武器がぶら下がっているようだ

が、中でも一際目を引くのはその背に背負う身の丈程もある大剣だ。分厚く長大なそれはおおよそ凡百な者では持ち上げること叶わぬだろう。

男を見て、主人は思った。

こんな装備で男は一体何と戦おうというのだろうか？ これではまるで一人で砦にでも殴り込もうという様なものだ、と。

若い戦士が見栄を張って身の程に合わぬ物を装備していることは良くある話だが、この男が持つ武具のどれにも細かい傷や錆があり、それを否定している。

これらの過剰ともいえる装備は、男の黒髪に外套という容貌とも相まり、見る者に少々不気味ささえも感じさせた。

「そうか、今はこんな時代だ。あんたにどうか、九大……おっと、八大神のご加護がありますように」

しかし、この宿の主人はこの大熊の様な男に気前良く接した。

なぜならブルーマはスカイリムにほど近く、「ノルド」が多い街だからだ。

「ノルド」とは、男の目的地でもあるスカイリム地方の大多数を占める人種だ。

彼らは屈強な戦士を好む傾向が非常に強く、また彼ら自身も誇り高き戦士の種族だ。

そんな彼らからすれば男のような物騒なナリの間人もある程度好意的に写るのだろう。この街の間人は比較的この男に対し友好的であるのだ。

「名を聞いておいて良いかい？ あんたはそのうち名を上げそうだ」

宿の主人の問いに、男は一瞬黙り込み。

「エドアード……俺の名は、エドアードだ」

またぶつきらぼうに一言だけ答える。

そして男は、

エドアードは扉を開き外へと出っ行って行った。

~~~~~

宿屋を後にしたエドアードは、街を出るため東門へ向かう。

「……だいぶ冷えてきたな」

ハーッと息を吐くと、白銀の煙となつて、やがて再び空気に溶けていった。

この街はジェラル山脈中腹に位置しており、極北の地スカイリム地方への入り口でもある。北方かつ標高も高いおかげか一年中雪が降る豪雪地だ。

いくら最も厳しい寒さの時季を過ぎたとはいえ、ここよりもっと寒いスカイリムを

目指すエドアードの装備は些か物足りなく見えた。

なけなしのような外套と鎧に付いた最低限の凍傷避けの符呪、それくらいだ。

しかし、これで問題は無いのだ。

エドアードもまた、「ノルド」であるのだから。

寒冷地スカイリムで生きるノルドは、寒さに対して大きな耐性を持つのだ。スカイリムに行けば雪の中を半袖半ズボンで駆け回るノルドの子供も珍しくはない。暫く南方を旅していたノルドのエドアードにとっては、この程度の寒さならば寧ろ心地よいくらいだろう。ノルドが多いこの街も周りをよく見ればエドアードの様に気候に不釣り合いな装いの者も多い。

他の種族にも触れておくと、人間種には他にインペリアル、レッドガード、ブレトンなどの人種がいて（ここでは説明を省くが……）、ノルドが寒さに強い様に、彼らもまたそれぞれの特性をもっている。

そして亜人種と呼ばれる種族もいて

猫の様なカジート、爬虫類の様な顔や身体のアルゴニアン、魔法に長けたエルフ（マー）など多く存在している。彼ら亜人種も人間種の様更に多くの種族に枝別れしており、それぞれがまた別の種族的特性をもつのだ。

エドアードが広場の脇を通り抜けて東門に向かっていると、何やら喧騒を耳にする。

「——ッ！——ッ!!」

大きな声で話している男は、特徴的な黒いローブ、切れ目に尖った耳……エルフ。中でもあの淡黄色の肌はアルトマー種（ハイエルフ）だろう。魔法に長けたエルフの中でも、更に魔法に長けた種族だ。

どうやら大きな馬車を引いたエルフの集団と、青い顔をした僧侶の様な男が揉めているようだ。

エルフと僧侶という組み合わせで、おおよそ何を揉めているのかは見当がついた。

「貴様、先程『九大神』などと言ったな？ 我々の知る限り、神々は八大神である筈なのだが？ んん？」

広場に近づくくと、エルフがニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら僧侶に詰問していた。

「ここは昔、あの忌まわしき邪神の教会であつたらしいな。しかしおかしいな？ 帝国は先の大戦での協定で、その信仰を悔い改めたと思つていたのだが？」

「ぐ……」

……先の大戦、協定。

おそらくは『白金協定』

『白金協定』とは、26年前に終結した『大戦』の和平協定だ。

『大戦』とは、エルフの集団——特に南方のサマーセット諸島に多く住むエルフ人種『アルトマー』——を中心に組織された『アルドメリ自治領』と、大陸の大部分を支配する人間達の『帝国』との間で起きた大戦争である。

両者の多大な損耗の末に、帝国で信仰されている九大神の中の一柱タロス神の信仰を禁じる協定が結ばれ、九大神が八大神になり和睦が成立した。

(タロス神とは、またの名をタイバー・セプティムと呼ばれる人物が神格化された神である。

タイバーはタムリエルの全人種全種族を征服、統一し、現在の帝国の基礎を築いた人物である。その征服された種族の中にはもちろんエルフ達も含まれており、それ故に彼らはタイバー・セプティムとタロスを憎むのである。

実際にはこの協定にはその他多くの経緯と思惑があるのだが、ここでは割愛する)

戦争はその後にも爪痕を多く残し、エドアードがこれから向かう予定のスカイリム地方などではタロス信仰の禁止に反発した反乱が起きており、現在国を真つ二つにする内戦中である。その他の地域も帝国を離脱するなどした。

しかし、あの大きな犠牲を払った戦いの終結も、また次なる戦いまでの束の間の休息でしかないのだろう。



まさに「終わりなき季節」。

結局、アルドメリは帝国を、帝国はアルドメリを滅ぼすまで争いを止めることはないのだ。

そして今、この広場でエルフ——アルトマー達に青い顔で詰問されている僧侶は、この広場の教会、古くはタロス教会であつた場所の関係者なのだろう。

ジツと見ていると、直ぐそばで様子を伺つていた男が近寄ってくる。

「……あの坊さん、アルトマーの連中が広場に馬車の乗り入れをしてることに抗議したみたいなんだ」

頼んでもいないのに男は事情を話し始める。エドアードは別に興味もなかったが耳だけは傾ける。

「でも不味いことに、ここは『九大神』の見守る教会の広場って口を滑らせちまつたんだよ。あそこは前はタロス教会だつたからな。

あれ、たぶんサルモールの司法高官だぜ。助太刀してやりたいんだが……アレに連れて行かれたら終わりだ」

男は何かを期待する様な目でエドアードを見るが、気づかない振りをする。

『サルモール』——アルドメリ自治領の統治機構とも言える組織だ。

その中でも司法高官と呼ばれる黒衣の高官達。彼らにタロス信仰を疑われるのは非

常に不味いことである。協定により彼らには帝国内でも大きな権限が与えられており、タロス崇拜者を協定違反者として「連行」することができなのだ。

……そして、連行されて帰ってきたものは誰もいなくても言われている。

帝国も協定を盾にされると異を唱えることなどできないため、それを良いことにサルモールはやりたい放題というのも民衆の帝国への不満に繋がっている。

しかし、何故こんなところにサルモールの高官がいるのか？

エドアードは広場に停まる馬車に視線を向ける。

見た目は地味だが、かなりしつかりとした造りのものだ。見た所この高官が乗ってきたというより護衛してきたという風だ。高官直々に小隊を指揮して護衛するとなると、かなりの重要人物が乗っているのかもしれない。

しかし、そんな高位の人物がこんな僻地に？ という疑問もまた生まれるのだが。

「な、なあ、あんた……」

男は何か口にしようとするが、

「じゃあな」

それだけ言つて、踵を返して門へと歩き出す。

「お、おい」

好奇心も刺激されたが……まあ自分には関係のないことだ。あの僧侶も可哀想だが

生きては帰れまい。でもそんなことは自分の知ったことではないのだ。さっさと町を出よう。

そんなことを考えながら、エドアードは人だから離れようとする。すると。

『やめなさい』

馬車の中から声が響いた。

『あなた達、こんなところで油を売っている暇は無いですでしょう？』

女——いや、少女だろうか？

その声には幼さの残った様な響きがあった。

「……しかし、この者は邪教徒であると思われませんが」

『もう一度言うわ。こんなところで油を売っていて良いのかしら？ 目立つなと卿に言

われたのではないの？』

そう言われアルトマーは僧侶を一瞥し、チツと小さく舌打ちをして馬車の方へ戻って行く。僧侶は腰が抜けたようにその場にへたり込んだ。

広場には安堵の空気が広がる。

何故サルモールの高官が少女などを護ってこんな僻地に来ているのか。やはり多少興味はあった。しかし、こんなところで油を売っている暇はない。

また面倒事が起きる前に、エドアードは町を離れることにした。

く  
く  
く  
く

馬車に揺られ、目を覚ましあたりを見回す。

この馬車の中は外見からは想像がつかない程の見事な飾り付けがなされており、フカフカのソファにマジックアイテムによる空調も効いていて何の不自由もない、まるで王侯貴族の乗る様な馬車だ。

しかし、それと不満が無いかということとは全くの別問題である。

ここは牢獄なのだ。

申し訳程度に取り付けられた小窓は、外の寒さのせいか曇ってしまつてよく見えな  
い。

窓の曇りを取って、今日も少女は外の世界を眺める。その瞳に儂い期待と、憧れと、そして諦めの色を宿し。

エルフの少女は山の向こうを、ただ遠くを見ていた。

## 第2話 「酒場の噂」

ジエラール山脈ペイル峠を越えた先、そこには重く雪を被った針葉樹の銀世界が広がっていた。

スカイリム地方南端、ファルクリース地域が見えてきたのだ。ここの先にある関所を越えればスカイリム地方だ。

「通行税はレマン銀貨3枚になります」

関所に着いたエドアードは、通行税として銀貨を3枚請求される。

現在帝国ではセプティム金貨、レマン銀貨、アレツシア銅貨の三種の通貨が主に流通している。相対価値は25アレツシア銅が1レマン銀、10レマン銀が1セプティム金というふうだ。

なおスカイリムは内戦中で、銀の一大産出地であるリーチ地方の混乱などによって、常にこの相場に当てはまるとも言えないのだが。

エドアードはレマン銀貨を3枚、皮袋から取り出して兵士に手渡す。

これは決して安くはない出費だ。

スカイリムの一般人にとって、狩猟などを収入に入れても平均年収は多くとも25セ

プティム金貨（実際に庶民が金貨を扱うことは殆どないのだが）、日給に換算するのだいたい23〜25アレッシア銅程度だろう。

銀貨1枚が銅貨25枚であるからして、つまり今支払った通行税はだいたい一般市民の3日の稼ぎに等しい。

関所の通行税は荷物価格のおおよそ1%だ。武器以外に殆ど荷物のないエドアードだが、鎧や武器類などの装備は税の対象となる。

レマン銀貨3枚が徴収されたということは、関所はエドアードの装備一式を金貨30枚分もの価値と判断したということになる。

エドアードは今までの旅の途上で、傭兵や用心棒のほか、古代の遺跡や洞窟の探索など冒険者の真似事の様なこともしてきた。その際に見つけた物品や古代の秘宝を換金してきた。

危険も伴う分の実入りはかなり期待できたので、エドアードは一般市民からすればかなり金を持っている部類であり、武器には惜しまず金を注ぎ込んできたのである。

ただ決して余裕があるわけでもない。

スカイリムの街に着けばまた何かしら金を稼ぐ必要は出てくるだろう。

スカイリムには古代ノルドの遺跡などが各地に点在しており、数回も探索すれば当面の資金は手に入るだろう。それに内戦中のスカイリムでは傭兵や用心棒としての仕事

にも困らなさそうだ。出稼ぎに来たわけでもないのだが、働き口が多いに越したことはないだろう。

そんなことを考えつつ、エドアードは関所の門を通り抜け、スウツと一呼吸する。

「ハアア……」

再び、銀色の息が空に溶けていく。

「帰ってきたな……」

ここを飛び出した時のことを思い出し、苦々しく思うと同時に懐かしくも感じる。

やはり、ここが自分の故郷なのだ。

少しだけ感慨に耽りながらも、エドアードは最寄りの大きな街である『ヘルゲン』へと向かうため山を降りて行く。

~~~~~

スカイリムは基本的にいくつ地域に別れており、それぞれが首都をもっている。

内戦帝国軍本拠地、スカイリム全体の首都でもあるソリチュードの街を擁するハイフィンガル地方。

内戦独立派、通称ストームクロークの本拠地であり、古都ウインドヘルム擁するイーストマーチ地方。

そして、スカイリム地方中心部に位置しており、軍事的商業的要衝でありながら内戦においては中立の立場に立つ都市ホワイトランを擁するホワイトラン地方。

等々、他にも6つの地域に別れているが、スカイリムの現状を語るのに、ここで全てを語る必要もないだろう。

これらの都市にはそれぞれ首長と呼ばれる地域の長が住んでおり、（内戦中の現在は事実上空席であるが）その首長達の中で選ばれた者が上級王としてスカイリムを帝国から委任統治するのだ。

そしてここ『ヘルゲン』は、ファルクリース地方東部のジェラール山脈の麓の街だ。厚い城壁に囲まれ商人の往来も盛んであり、地方首都を差し置いてファルクリース地方で最も発展している都市といえる。

何故これ程発展したのかというと、それはやはり地政学的要因にある。

エドアードがそうである様に、ヘルゲンはシロデイルからスカイリムに訪れた者が、おそらくは最初に訪れる街だろう。また北はホワイトラン、東は商業盛んなリフト、西は銀産出地のリーチと重要な地勢を占めている。

それ故シロデイルとスカイリムの交易の重要拠点であり、同時に軍事的価値も大きく、それがこの街の城壁を更に厚いものとし、また人を呼び込んだのだ。

エドアードが街の中に入ると、駐屯している帝国の兵士達と傭兵で溢れかえっていた。それを目当てにした商人達の出店の活気で、内戦中だというのに寧ろ街は嘗て無い程の好景気の只中であつた。

(内戦中だつてのに。人間てのはゲンキンなもんだな)

一服する為に酒場に寄つたエドアードであつたが、この喧騒では全く休むことなどできない。気性の荒い荒くれ者達が真昼間から飲んで歌つて騒いでいる様を見ていると、つくづく帰ってきてしまったという実感に襲われる。

「どうだね？ 当店自慢のジュニパーベリーの蜂蜜酒は？」

蜂蜜酒をチビチビと啜っていると、男が寄つてきた。

「あんたは？」

名を尋ねる。

「俺はヴィロット、この酒場の主人だ」

ノルド特有の金髪に人の良さそうな垂れ目が特徴的な男だ。

「これはここでしか飲めない一品だ。わざわざこれを飲みに来る奴もいるもんさ」

チラリとジョッキに目を向ける。

少し燻んだ黄金色の蜂蜜酒の中に、確かにジュニパーベリーの甘みとスパイシーさを感じる。

「……確かに悪くないな」

無愛想に答えると、ヴィロットはうんうんと嬉しそうに頷く。

「そうだろう！ これはなんたって——」

「それで俺に何の用なんだ？」

長い自慢話が始まりそうだったので、エドアードは先に釘を刺しておく。

わざわざこの混雑の中から自分を選んで話しかけてきたのだ。おそらく何らかの用件があるのだろう。エドアードはそう考えていた。

「おお、そうだったそうだった」

ヴィロットはニヤリと笑う。

「あんた中々な装備（ナリ）をしてるようだがな。なんだ、あんたもシロデイルからこの内戦で一儲けしに来た口かい？」

……そういうことか。

酒場は旅人にとって重要な情報の収集源である。故に旅人達にとって良い酒場とは、ただ飯と酒が美味いだけではダメなのだ。

付近や地域の情勢からタムリエル大陸全体のことまで、より詳しく知る為の情報源としての役割が期待されるのである。また酒場の店主というのはそういった役割からか顔が広く、首長が街の戦士達にモンスターや山賊達の討伐などを依頼する際には戦士達と首長達地方政府の窓口となることも多々ある。

おそらくはこのヴィロツトも、傭兵然としたエドアードから何か話を聞いておこうと思っただのろう。

ちようどいい。エドアードはそう思った。自分も今のスカイリムを詳しく知る必要があったのだ。

「いや、俺はこんなナリだが別に傭兵ってわけじゃあない」

「なんだそうだったのか、俺はてつきり……」

「つい最近南方から帰ってきたばかりでな。里帰りみたいなもんだ」

ヴィロツトは一瞬落胆した様にも見えたが、エドアードが珍しい南方へ行って帰って

きた旅人と聞いて、案の定食いついてくる。

「そうか！ 南方から帰ってきた同胞だったとは！ このご時世、傭兵でもないのにスカイリムに帰ってくるなんて珍しい！」

しかし、その南方やらの話を聞かせて貰えると助かるね！ アルドメリ自治領のせいで、最近はその南方からの旅人はあんまり来ないんだよ」

エドアードは数年前まで主にシロデイル南方を旅していた。時には、アルドメリ自治領の属領であるエルスウエアやヴァレンウッド、帝国から離脱したハンマーフェル地方にも訪れていたこともある。さすがにサマーセット諸島は無いが。

ヴィロツトも言う様に、今のアルドメリ自治領やその周辺に立ち寄る者は先の大戦の影響で非常に少ない。

「スカイリムは久しぶりなんでな。内戦関係の話を詳しく聞かせて貰えると、こちらも助かる」

「よし来た！ 飯にイロつけとくよ！」

~~~~~

現在、スカイリムの民は独立派の反乱軍と帝国派の帝国軍に別れて内戦中である。

独立派の指導者はウルフリック・ストームクロークという男だ。

(反乱軍がストームクローク軍というのはこの男の名を冠しているのだろうか)

タロス信仰を唱えるこの男がスカイリムを統治する上級王トリグを殺したことが契機となつて内戦は始まった。

何でも、この時この男は「声の力」(シャウト)と呼ばれる伝説的な魔法で上級王を八つ裂きにしたと言われているらしい。何とも眉唾な話であるが……。

そして、現在ストームクロークはウインドヘルムを本拠地として、イーストマーチ、リフト、ペイル東部、飛び地でリーチ南部を占領している。

変わつて帝国派。

帝国軍の指導者は帝国から派遣されてきた、帝国軍第8軍団将軍であるテュリウスという男だ。

帝国軍は本拠地ソリチュード擁すハーフィンガル地方を筆頭に、ハイヤルマーチ、ペイル西部、ウインターホールド、リーチ北部、さらに飛び地でファルクリースを占領している。

なお、スカイリム中央のホワイトランは危ういながらも唯一の中立の立場にあるらしい。

戦況は、ついこの間にペイル西部を奪取した帝国軍が有利とのことである。

しかし、雪の降る季節ということや、中央のホワイトラン平原が不可侵の中立地帯であるせいで大軍を展開しにくい状況にあり、互いに決定打を欠いていて現在半ば膠着状態にあるらしい。

雪解けしてきた時にどう動くか、そしてホワイトランなどの中立勢力を如何に取り込むかということが今後の戦況を大きく左右することになるだろうとのことだ。

赤色 帝国

青色 ストームクローク

黄色 中立

エドアードが内戦について知っていた情報と、ヴィロツトにより今知った情報を併せて整理するとこんなところだろうか。

膠着状態とはいえ散発的な小競り合いは各地起こっているらしく、出来るだけ巻き込

まれないように用心しなければならぬだろう。

そして内戦以外にもいくつかの懸念事項がある。

それはアルドメリ自治領統治機構——『サルモール』だ。

帝国支配下の各都市では彼らエルフの部隊が自由に出入りしており、タロス信者狩りどころか気に入らない民間人までも連行することがあるようだ。

関わりなければそう心配ないだろうが、念のためこちらにも気をつけた方がいいだろう。

彼らと敵対すると非常に厄介なことになる。それはブルーマの街でも見てきたことだ。

「よし」

明日早朝には出発する予定だ。蜂蜜酒も程々にして、そろそろ宿屋へ向かうことしよう。

エドアードはそう考えて、割安な代金を支払って酒場を後にしようとする。

「ああ、そうそう！」

だが、そこでヴィロットのオヤジが何かを思い出したように声をあげた。そして周りを伺いながら、耳打ちをする様に小声で話し始める。

「言い忘れてたんだがね……」

最近ここらで出るらしいんだよ」

「……出る？」

「ああ、スカイリム中をあちこち旅してる奴がこの前話してたんだよ。

……『亡霊の戦士』が出るって」

エドアードは唐突に、凍りついたようにピタリと動きを止めた。

「あんたも聞いたことがないか？」

むかーしむかしから、人を襲ってるっていう黒い鎧と大剣のバケモノ」

「……」

「各地でたまーに目撃例があったらしいんだが、最近スカイリムでも見た奴が大勢いるって噂さ。」

何でも南方の山賊砦で100人皆殺しにしたとか煙みたくに消えちまうだとか、とても信じられないような話ばかりでどうにも——ん？ どうしたんだ？」

固まったままのエドアードに、ヴィロツトは声をかける。

「おい……？ 何だ、肝でも冷やしたのか？」

すると、静かにゆっくりと、彼は口を開いた。

「……ああ、知っている。知っているとも。俺は、そいつを知っている。」



だから俺はここに、スカイリムに帰ってきたんだ」  
「ジョッキを握りしめられたジョッキが、ミシリ、と音を立てた。

## ※世界観の紹介1 「世界について1」

＞宇宙とそれぞれの世界、空間

・オルビス

下記のオブリビオン、エセリウス、ムンダスの全てを内包する概念。

虚無とも、ムーアとも呼ばれることも。

・オブリビオン

魔王やら魔神やらと呼ばれる、人にとっては悪神として扱われることが多いデイドラという神が住まう空間。

何となく地獄のようなものと思っておけば良い。

・エセリウス

時を司る竜神アカトシユなどのエイドラが住まう領域。人にとっては善なる神とされる者たちが多く住まう。

天界のようなものと、ふんわり考えておけば良い。

オブリビオンを越えた先にあるので、人の領域であるムンダスからは遠いとされている。

・ムンダス

ニルンなどの惑星が存在する空間。

宇宙のようなもの。

定命の領域と呼ばれており、人などの生まれながらに限りある命ある者どもが住まう。

オブリビオンと呼ばれる領域の中に、創造神ロルカーンが他の神々と共に創造した。

惑星はニルン以外にもあるかもしれないが、太陽を始めとするニルンの空に輝く星々の殆どは、空間に開いた穴でしかない。しかし、月はれっきとした星である。

穴の先はエセリウスに繋がっているとされており、絶えずマジカ（魔力）が流入しているとされている。

・ニルン

タムリエルなどの大陸が存在する惑星。

地球に相当する。

・タムリエル大陸

惑星ニルンにある大陸。

The Elder Scrolls シリーズは基本的にこの大陸が舞台となっている。

今作の舞台もここ。

タムリエル大陸

＞タムリエル大陸の諸地方

・スカイリム地方

今作の舞台。基本的には雪に閉ざされており、人種はノルドが支配的な地域。

タムリエル大陸で最初に人が到達した土地と言われている。アトモーラと呼ばれる更に北方の大陸が寒冷化により人が住めなくなったことが、人のタムリエル入植の契機となったと言われており、タムリエルでの人間最古の街もこの地方にある。

現在は帝国派と独立派で内戦中。

・シロディール地方

タムリエル大陸で最も肥沃な土地。

北部は山脈、南方は密林であるが、基本的に中央は平野が続いており、比較的気候も安定している。

人種はインペリアルが支配的であるが、あらゆる種族が入り混じる。

中央にはニベン河が通っており、その中洲にあるハートランド島に帝都インペリアル・シテイがある。

・ハイロツク地方

中心的な都市はダガーフォール。

帝国領であるが、支配的な人種であるブレトンの貴族が血みどろな政争をしている。

また、西のオルシニウムにはオークが多く住む。

半島状の形をしており、内側の海にはデイレニの塔と呼ばれる、太古に神々が作ったと言われる塔がある。

・ハンマーフェル地方

アリクル砂漠が広がっていて、そこに住むレッドガードが支配的な人種である地域。

白金戦争で帝国に見捨てられ、独力でアルドメリ自治領と戦い、追い払った。

その時のことで帝国を恨んでいる。

・モロウインド地方

ダンマーが多く住む地域で、ヴァーデンフェル島と呼ばれる巨大な島を中心としているが、ヴァーデンフェル島の巨大火山、レッドマウンテンの大噴火により、ヴァーデンフェル島は壊滅、その際にブラックマーシユから攻め込んで来たアルゴニアンに、残った南方の大部分を占拠された。

・ブラックマーシユ地方

毒や疫病に溢れた沼地だらけの土地。

アルゴニアンが支配的な地域。

現在は帝国から離脱している。

そう簡単に人が立ち入れないので、よく分かっていないことが多い。

・サマーセツト諸島

アルトマー（ハイエルフ）が支配的な土地で、帝国を離脱した際にエルフ以外は皆殺しにされたとされており、人が立ち入れない。

・エルスウエア地方

カジートが支配的な地域。

砂漠と密林、荒野が広がっているとされている。

現在はアルドメリ自治領に組み込まれている。

・ヴァレンウッド地方

密林が広がっているとわれ、ウッドエルフが支配的な土地である。

また、現在はアルドメリ自治領に組み込まれている。

その他重要な用語

＞帝国

人、特にインペリアルを中心とした帝国。支配する各地方に、ある程度の自治権があり、各々の王（統治者）を束ねるように皇帝が君臨している。

首都はシロデイル地方の中心の島、ハートランドにある。

一時は大陸全土を支配していたが、現在はアルドメリ自治領に押されて、領土を大きく減らしている。

・第一帝国

聖アレツシアにより打ち立てられた人類最初の帝国。

アカトシユとの契約により、アカトシユの加護を持つ血族（ドラゴンボーンの血族）が皇帝となり、王者のアミュレットを持つている限り、帝都のドラゴンファンは灯され、オブリビオンのデイドラから世界を守る障壁を張って貰えるようにした。

・第二帝国

レマン朝。

・第三帝国

セプティム朝。

タイバー・セプティムにより、タムリエル全土を統一して打ち立てられた。

オブリビオンから魔王メエルーンズ・デイゴンが攻めて来た際に、セプティム朝の最後の皇帝マーティン・セプティムが、王者のアミュレットを砕き竜神アカトシユを召喚し、デイゴンを追い払った。

これによりマーティンは死亡し、セプティム朝は滅びた。

・第四帝国

ここではミード家により打ち立てられたミード朝のことを言う。

彼らはアカトシユに選ばれたドラゴンボーンではなく、加護を持たない上に、王者のアミュレットも失われた為に、アレツシアやレマン、セプティムのようにオブリビオンの悪神による侵略からタムリエルを守る術を持たない。

>アルドメリ自治領

帝国から分離したエルフ達を作った国。昔にも同じ名前の国が存在した。

特にサマーセット諸島を中心とする。

他にもエルスウェア地方や、ヴァレンウッド地方なども支配する。



旧来はサマーセット諸島にはアルトマーの王族がいたらしいが、今は追放されているようだ。

・サルモール

アルドメリ自治領の統治機構。

特にサマーセット諸島のアルトマー種により構成されている。

エルフ絶対主義的で、サマーセット諸島では、エルフ以外の種族は、彼らに皆殺しにされたとも言われる。

司法高官と呼ばれる管理職めいた者達がいる。が、大使館を任される者から罪人の連行の責任者まで、皆同じ役職なので、それ以外には役職がないのかと不安になる。今作では勝手にある程度役職を作ってしまうかもしれない。

基本的に性格が悪い者が多い。

・白金戦争

アルドメリ自治領と帝国の戦争。大戦などとも呼ばれる。

アルドメリ自治領が、帝国に対してハンマーフェル地方の割譲とタロス崇拜の禁止を要求したことに端を発する。

両者の多大な損耗の末に、当初の要求を帝国が呑む形で終結した。

この時に結ばれた協定を『白金協定』と呼ぶ。

当然ながらハンマーフェルは反発し、独力でアルドメリ自治領に立ち向かい、最終的には侵略を跳ね除けた。結果的に帝国の判断が誤っていたことを証明してしまったとも言われる。

・ドラゴンボーン

竜の血脈と呼ばれる。

時の竜神アカトシユの加護を持ち、不滅の存在であるドラゴンを唯一葬ることが出来る力を持つ、究極のドラゴンスレイヤー。

また、竜の言葉である『シャウト』という特別な魔法も生まれながらに操れる。

第一帝国の初代皇帝アレツシア以降、第三帝国セプティム朝の最後の皇帝、マーティン・セプティムまでの歴代の皇帝は皆、このドラゴンボーンであったと考えられる…が、これには少し疑問もある。

アレツシアはドラゴンスレイヤーとしての能力はなかったようで、それでもドラゴンボーンと呼ばれている。

アカトシユの加護を持つ者をドラゴンボーンと呼ぶのであって、能力は関係ないのかもしれない。

## 第3話 「脱走」

十数人の武装小隊に護られた1台の馬車が、雪の残るガタガタとした山道を物ともせずに進んでいた。

馬車は外見こそ地味無難ではあるが、それはそのままこの馬車の価値を示してはいない。車体も車輪も最新式の物で、その他のどの部品もが細かな魔術符呪による補強、防護措置が施されている。それを選び抜かれた寒さに強いスカイリム産良馬数頭に引かせているのだ。そこいらの馬車とはとても比べ物にならない、例えばどんな悪路でも進むことができる代物だろう。

しかし、一体どうしてそんな大変な馬車を、こんな地味な見た目に仕上げているのかという……やはり、できる限り目立ちたくないからなのだろう。

「なんとってこんな辺境にまで駆り出されなきゃならないんだ……」

サルモール独特の兵装に身を包んだアルトマーの兵士が上官へ愚痴る様に言った。

「おい、あまり無駄口を叩くな。司法高官殿に聞こえるぞ」

「……だってそうでしょう？　こんな大層な馬車を護衛するつてんだからシロディール行きかと思えば、気づけばこんなところまで来て」

諫めた上官は、御者の横で踏ん反り返るように座る司法高官に聞こえてはいないかチラリと伺う。……どうやら問題ないようだ。

「まあ確かにな。貴人を秘密裏に移送する時にはこんな馬車が使われることがあると聞くが、内戦中のスカイリムへつてのもおかしなものだ」

兵士達の疑問はそこだった。

任務内容は馬車の護衛。これは良くあることだ。しかし、彼らは護衛する人物のことを全く聞かされていないのである。しかも自分達の見ているところでは、その人物は外に出てきさえしない。全ての世話はあの高慢ちきな司法高官と隊長が直々に行っている徹底ぶりだ。たまに聞こえる声音やたまにチラと見える姿から、少女であることだけがわかつているが、それはまた謎に拍車をかけるだけだった。司法高官や隊長に尋ねたところで、

「お前たちが知る必要はない」

その一点張りである。

護衛の数は少なめではあるが、秘密裏の移送と考えれば最大限というくらいの数ではあるだろう。（質で言えばほぼ全員アルトマーの魔闘士スぺルソルトと考えればやり過ぎなくらいで

あろうが、)

目立ちたくないが対象の安全は必ず確保したい。そんな絶妙な思惑が見え隠れする。しかしそれでいて運んでいる先は内戦中にあるスカイリムというのだ。

最初は軍人とも考えたが少女であろうということがそれを否定する。だいたいただの軍人ならばこうも徹底した扱いにもならないだろうし、どんな人物かさえ知らされなということも無いはずだ。

ではいったいどんな人物を、どんな目的があつて運んでいるのだろうか？ ……それはやはり自分達の知るべきことではないのだろう。

隊長や司法高官の態度からして、これは極秘任務の一環であることは間違いない。詳細を知ってしまうと、いくらサルモールの一員とはいえ自分達もマズイことになる可能性がある。

サルモールという集団は秘密の維持の為ならば、平気で『そういったこと』をやるだろう。そしておそらくこの任務の失敗もまたそれと同じ様な道を辿ることを意味するのかもしれない。

……深く考えずに黙々と終わらせよう。そして早く暖かいサマーセットに帰りたい。兵士達がそんなことを考えているうちにスカイリムとの国境関所が見えてきた。

関所の衛兵達が馬車に駆け寄ってくる。

「……馬車の中を点検をしてよろしいでしょうか？」

衛兵達の声や視線から若干硬いものを感じる。それに対応するこちら側もそうだ。空気が物々しいような雰囲気を感じ、ピリピリとした緊張が生まれる。

これも仕方がないことだ。

『大戦』は終結したとはいえ、実質ただの長めの休戦だということお互いにわかっているのだ。遠くない未来にまた殺し合いをすることになる。お互いに敵だという認識がこの様な空気を作り出すのだろう。

「特別手形だ。早く通していただこうか？」

司法高官が高圧な態度で紙切れを一枚手渡す。

自分たちにさえこの任務内容は秘匿されているのだ。当然、帝国側の兵士達に馬車を調べさせる筈もない。根回しが既に済ませてあるのはあたりまえのことだろう。

「……申し訳ありませんでした。それではお通り下さい」

ピリピリとした空気の中、一行はゆっくりと関所を通り抜ける。関所から少し離れたあたりで、心なしか兵士達が、ふーっ、と息を吐いたように聞こえた。

とにかく、スカイリムに着いたのだ。

自分達の任務は大使館に到着するまでの護衛だ。長めの任務だったので、この後に少しは休暇を貰えるだろう。そう思えば、彼らも自然と足が軽くなるというものだった。

そうして関所から暫く下り、そろそろヘルゲンに着こうという時だった。「うん？」

兵士の1人が、何やら声を上げる。

「どうしたんだ？」

「いや、何か物音がした気がするんだ」

周囲の者が耳を澄ましてみるが何も聞こえない。

「……気のせいじゃないか？ スカイリムは鹿やら熊やら野生動物が多いしそれだろう」

ガサガサ……

……いや、違う。

今度は大きな音で、森の奥から木を擦るような音が聞こえてくる。

「おい、なんなんだこの音？」

ガサツガサガサツ！ ガサガサガサ！！

だんだんと音が大きくなってくる。

明らかに、こちらに何か近づいてきている。

「各員、警戒態勢！！」

隊長が声を張り上げると、小隊は瞬時に警戒態勢に入る。

皆、身体を硬くする。

熊か狼ならば良いのだが、熊や狼は、こんな明らかで異様な殺気（……）を発さない。  
……ザザッ!!

そして、熊でも狼でもない『何か』が——姿を現した。

ヘルゲンを後にしたエドアードは、次は西のファルクリースの街を経由して北に向かいホワイトラン地方を目指すつもりでいた。

（西にある森を抜けて行けばファルクリースの街に着くはずだ）

酒場のヴィロットによると、西ホワイトラン地方への入り口の一つであるサンダーストーン渓谷周辺では定期的に帝国兵とストームクローク兵の小競り合いが起きているらしい。

それでも基本的に大規模な戦闘が起こることはないので、通り抜けられないということはないらしい。

そこからエドアードはホワイトランに入れるだろうと考えていた。



……実はここから真つ直ぐと北上すれば、簡単にホワイトランへ着くのだが。だが、エドアードはわざと西に大回りするルートを取ることにしていた。

何故ならまっすぐホワイトランを直指すと、着くまでには必ず通り抜けねばならない場所があるからだ。そこを通り抜けるのが少し気が向かないのだ。

エドアードは北の方角を、懐かしさと少し複雑な感慨に耽りながら眺めていた。

エルフの少女はフカフカのソファには座らず床に座り込んでいた。長旅のせいかさ  
れとも他の理由か、美しい金髪は些か艶を失っている。

少女はふと、ほんの少し昔を思い出す。

世話係につけられた侍女がいた。外に出ることは疎か、娯楽さえも許されぬ身の自分を哀れに思ったのか何冊か本を持ってきてくれたことがあった。勇ましい冒険譚や女性の好みそうなロマンスものが多かった。

大牢獄から脱出する盗賊達の物語。

大海原を船で駆ける海賊達の物語。

……囚われのお姫様を救い出しに現れる、勇者の物語。

自分にもいつかそんな冒険をする時が来るのではないか。そんな淡い期待を抱いてしまいうくらいには熱中してしまった。

次、また次と侍女に頼み物語を持って来てもらった。侍女もそんな自分の様子を見て、満足気にしてくれていた。

……しかし、しばらくしてその侍女は姿を見せなくなった。

次に用意された侍女は話しかけると怯えた様な顔で目を伏せるだけであった。

少女は自分を哀れんでくれた侍女が、その後どうなったのかは知り得なかった。知りたくなかった。

自分はこのまま一生「奴ら」の言いなりに、思い通りに生きていくしかない。そんな半ば確信めいた諦念は少女を深く絶望させていた。

運命が決まっているのなら、いつそ舌でも噛んでみた方が手っ取り早くて良いのではないか、油断するとそんな思いに心が傾きそうになるほどに。

ズズンツ!!

その時だった。何かがぶつかる様な音と共に馬車が急ブレーキした。

「キャッー!」

その強い衝撃に少女は壁へ打ち付けられる。

何があったのだらう? 事故でも起こしたのか。

そう思っていると、何やら外から悲鳴のようなものが聞こえてくる。少女はまた、小さな窓から外を覗く。

何なんだ。これは、一体何なんだ。

人の形をした何かがちぎれ、吹き飛び、宙を舞う光景を兵士たちは半ば呆然として見ていた。

話は数分、いや、数十秒前に遡る。

森から飛び出してきた「何か」は、隊列のど真ん中に降り立った。その「何か」は、黒い霧の様に揺らいでいたが、じきに焦点が合ったように黒い甲冑に像を結んでいった。

「ルオオオオオオオ!!」

「亡霊」は雄叫びをあげる様に叫ぶと、背に背負った大剣に手を掛けた。

「抜かせるな!」

小隊長の声が響いた。

この任務に選ばれた兵士たちは、これでも先の大戦を生き抜いた強者ばかりだ。急な

事態に陥ったとしても、そう冷静さを欠くものではない。

「馬車を守れ!!」

兵士達は冷静に黒い甲冑の戦士を囲みこみ、一斉に襲いかかった。隙のない槍袞だ。殺った。誰もがそう思った。だが。

次の瞬間、兵士達、いや。

「兵士達だったモノ」が、宙を舞っていた。

その「中身」が、バシャバシャと音を立てて地に落ちた。白い雪の上に赤が飛び散った。

「……は？」

ポツンと、間拔けな声が響く。

何が起きたのか誰も理解できなかった。

誰も身動き一つ取らなかった。

ただ一人動いている黒い甲冑の戦士が、グルンツ！ と血糊を振り払うように巨大な大剣を薙ぎはらうと、凄まじい剣風と共に血飛沫が舞った。

「ルオオオオオオ!!」

亡霊の獣の様な叫びが再び森に響く。

宙を舞った兵士がこちらに飛んでくる。

ドオン！

そのまま激突し、馬車を大きく揺らす。

「キヤツ！」

小さく悲鳴をあげてしまう。

少女が再び外を覗き込むと、また一人、兵士が襲い掛かっているとところだった。兵士は巨大な大剣の一撃を剣で防ぐが、剣は根元からポツキリ折れてそのまま宙を飛ぶ。

ベシヤツ！ と、兵士が馬車の前に落ちてきた。大剣が硬い鎧を貫通したのか、身体の半分は千切れてしまつて手足はあらぬ方向を向いていた。

「……うつ、ぷ」

(怖い)

もはや虐殺とも言える場面を目の当たりにして、恐怖と吐き気が込み上げ、身体がガクガクと震え始める。

キイ……

「ツ——！」

小さな物音に、ビクツと震えて慌てて振り向く。

なんと、扉が開いていた。

先程の衝撃で鍵が外れたのだろうか？

司法高官も兵士達も大混乱で気がつく様子はない。

逃げるなら、

外に出るなら、今しかない。

恐怖に震える少女の頭の中に、そんな囁きが聞こえた。

今ならば——今ならば、本当に逃げられるかもしれない。

少女はドアに手を掛ける。

……しかし、手を引くことができない。

手が動いてくれない。

(外は……外ではこんなことが起こるんだ)

扉の向こうへと意識を向けると、また兵士達の断末魔が聞こえてくる。

こんな世界に飛び出して行く勇氣など自分にあるのか。

それに、外に出たところで一体どうするのだろうか？

者もない。見知らぬ土地に身体一つで。

そんな考えが、少女を逡巡させた。

逃げ切れたとして頼れる

しかし、本を、少女が憧れた数々の物語を想う。

冒険譚の船乗り、盗賊、勇者、囚われのお姫様だって、ただ待っているだけの者はいなかった。

いつも自分で何か行動を起こしていたではないか。

冒険譚の様に上手く行くわけはない、わかっている。

しかし、ここで何もしなければ、ただ無意味に生きて、そして死ぬだけだ。

「そんなの、絶対に嫌」

目の前の運命の糸を掴みとるのは、誰でもない。自分自身だ。

運命を変えたければ、行動するしかないのだ。

少女は馬車の中の調度品に装飾されたものや、今までにこっそりくすねてきた高そうな小物類、宝石の入った小袋をできるだけひとつつかんで薄い服のポケットに詰める。

ドアに手を掛け、一度だけ深呼吸をする。

そして少女は自らの意志で、外への一步を踏み出す。

兵士は必死の形相で槍を突き出す……が、亡霊の戦士はそれを容易く掴みとる。

いくら引つ張つても万力の様な力で、ピクリとも動かせない。

そして、亡霊の戦士が槍をグンツと引き寄せる。

「ひっ・！」

亡霊の戦士はそのまま剣を突き立てると、兵士は腹から串刺しにされるように剣に突き刺さった。

そしてそのまま掲げるように剣を持ち上げた。

「あああああああ!!」

まだ息のある兵士の絶叫が響き渡る。

亡霊の戦士は鬱陶しそうに掲げた剣を一振りする。

串刺しになった兵士はそのまま吹っ飛んで、他の兵士たちの方へ転がっていった。

串刺しになっていた兵士は腕と足を不自然な方向に曲げて、ビクンビクンと痙攣していた。

「ヒ……ヒイイイ!!」

誰かが悲鳴を挙げる。

兵士の一人が逃亡を図ろうとする。

甲冑の戦士はそれを一瞥すると、ガバアと振りかぶって、掴んだままの槍を投げつけた。



槍は逃亡する兵士の頭の吹き飛ばし、兵士は糸が切れた人形のように崩れ落ちた。

「あ、ああ……」

最早、士気を保つことは不可能であった。

しかしそれでも逃げる者が一人しかないのは、彼らの兵士としての矜持か義務感か。……それとも、無駄なことだと悟ったのか。

しかし、『亡霊』に慈悲はない。

また次々と兵士達に襲いかかり、そして紙切れの様に吹き飛ばしていった。

たまに襲い掛かられる仲間援護の魔法を飛ばす者もいたが、鎧に魔法が施されているのか弾かれるようにたち消えてしまい全く意に介すことは無い。

「何をしている！ やれ！ 早く囲んで殺せ!!」

司法高官が悲鳴をあげるように叫ぶ。

しかし、もう全員足が竦んで隊の形を成してはいない。

亡霊の戦士は、ゆっくりと次の獲物へ向けて歩きだす。

兵士たちには、次の獲物が自分でないことを只々祈るしかなかった。だが、

「ググ……」

そこで、唐突に亡霊の戦士は動きを止めた。

急に落ち着きをなくし始める。

「グルオオオオオオオ!!!!」

空気を震わせる様な咆哮をあげ、今度こそ兵士たちの方へ走り出す。

半ば諦めと絶望を顔に貼り付けた兵士たちへと、凄まじい速度で距離をつめる。

そして……兵士達の目前で、再びピタリと動きを止めた。

「へ………？」

身構えていた兵士たちが、間拔けな声をあげる。

亡霊の戦士はブルブルと震え始めた。

そして次の瞬間には、スウ——ツと、実体を失うように消えてしまった。

「はっ………？」

またも兵士達の間拔けな声が響く。

「た、助かった………のか？」

辺りにあるのは木々の擦れる音と、静寂ばかりだ。

亡霊の戦士の気配は、もう何処にも、影も形もない。

「行ってくれた」

全員の顔に、安堵の色が見て取れた。

その言葉で緊張が解け、生き残った兵士たちはその場に腰を抜かした様にへたり込んだ。  
だ。

乾いた様に笑う者、殺戮を思い出し吐き出す者、放心した様に動かない者。様々だった。

……しかし。その中で二名だけが、明らかに様子が異なった。

小隊長は青い顔で、司法高官は紅潮した顔で、馬車の前に立っていた。もぬけの殻となった馬車の前で。

兵士たちは嫌な予感を感じつつ、上官達に視線を向ける。

「娘を探せ!!」

静まり返った森に怒声が響いた。

## 第4話「出会い」

「はあ……はあ……」

少女は森の中をあてもなく彷徨っていた。

「せめて、街道にさえ出られれば……」

少女にこのあたりの土地感はない。

見つかる危険はあるが、森の外の街道に出て道沿いに街まで行くしかない。日が暮れてしまえば、薄暗い森は、更に暗さを増してくるだろう。

少女の白い肌に、スカイリムの厳しい寒さが突き刺さる。

魔法の空調が効いた馬車の中から着の身着のまま飛び出してきたせいで、少女は薄い服に上着を一枚身に纏うのみであった。足には霜とまだ残る雪の冷たさがジンジンと染みってくる。

こんな格好で夜の森を動くことはできない。それに、グズグズしていればサルモールに追いつかれるかもしれない。

ガシヤツ

「……………」

何か、物音がした気がした。

足を止めて身を隠し、周囲を警戒し耳をすます。

ガシヤツガシヤツ

「……………」

これは、鎧のたてる音だ。

追手だ。間違いない。

しかし、まだこちらに気づいたわけではなさそうだ。

少女は想定したよりもずっと早い追手に焦りを覚えると同時に、複数音が聞こえたので、あの甲冑の戦士でないことに、少しだけ安堵する。

しかし、あの恐ろしい戦士を撃退できたのだろうか？

どちらにせよ、サルモールだろうと何だろうと、全く安心できる状況ではない。捕まれば再び、いや、もっと待遇は悪くなるだろう。

音を立てない様に、その場を離れようとする。しかし、

「……………キャツ！」

木の根に足を取られ、転けた拍子に声をあげてしまった。

(しまった！)

「……いたぞ!!」

少女の立てた音に反応し、兵士の1人が声をあげる。すぐさま、複数の足音が近づいてくる。

少女は急いで起き上がり、走り出す。

「待て!!」

その声と共に、すぐ横の木で閃光が弾けた。

雷撃の魔法だ。威力は大したことはないが、それでも華奢な少女が喰らって無事なものではない。少しくらい痺れさせ火傷させても、逃すよりはマシということだろうか。

今度は、少女の足元で大地の魔法が炸裂し、隆起する。

「きゃあああ!!」

華奢な身体が宙に投げ出される。

地面に全身を叩きつけられ、肺から息が全て吐き出される。

「ゴホッ、ゴホゴホッ!」

しかし、少女はよろめく身体に鞭を打って、またヨロヨロと走り出す。

もう二度と、あんなところに戻って堪るか。

ただその想いが、少女の足を懸命に動かしていた。

だが、現実には残酷なものである。

再び魔法が地面を揺らす。

少女はまたも宙に投げ出された。

二度も全身を打ち付け、今度こそ立ち上がることもできない少女に、二人の兵士達が追いついた。

「手間かけさせやがって!!」

兵士の怒声と乾いた音が森に響く。地面に伏せる少女の手を掴み上げ、兵士の一人が容赦なく殴りつけた。少女は悲鳴をあげる気力も無いのか、ぐったりとしていた。

しかし、兵士が髪をつかみあげると、少女は意思のある目で、しっかりと兵士を睨みつけていた。

それが癪に障ったのか、兵士は更に少女を殴りつける。

「こんな散々な任務!」

バシンッ!

「やってられねえつてのに!」

バシンッ!

「おまえのせいだ!」

バシンッ!

何度も、兵士の平手が少女の身体を打つ。その度に乾いた音が響く。

「お、おい……不味いだろ。」

一応護衛対象だぞ？高官にでもバレたら……」

側で見えていたもう一人が、気まずそうに止めに入る。

「確保優先、生きてれば構わないって言われたんだ。抵抗したからってでも言つときゃ、ばれやしないだろ」

兵士が再び少女の金髪を掴み上げると、その美しい顔が、白くみずみずしい肌が目に入る。

「へ、へへ……それに、よく見りゃ、可愛い顔してるじゃねえか」

兵士の顔に下卑たものが浮かぶ。

少女は首筋にゾワリとしたものを感じる。少女は『そういったこと』は、まだ良く知らなかった。

だが、自分の身に起きようとしていることを本能的に理解してしまう。

「もう、二度と逃げられないよう、教え込んでやる」

「お、おい！それは本当に不味いだろう!!」

兵士は仲間の制止も無視し、カチャカチャと腰のベルトを緩める。

「あんな酷い目にあつたんだ！」

あの訳の分からん剣士と！こいつのせいだ！もう沢山だ！」



この二人の兵士は、元はシロデールを根城にする追い剥ぎとその舎弟であった。帝都を略奪できると聞いて、大戦に乗じてアルドメリ自治領の軍に加わったのだ。

実際に美味しい思いをしてきたものの、戦争が終われば、規律のある集団というのは足枷でしかなかった。

ここに来て不満は爆発し、思考は短絡的になっていた。

「……へへ、なら、少しくらい、楽しんで行こうじゃねえか。山賊にでも襲われてたつてことにもすりやいいのさ。逃げたこいつの言うことなんて信じやしないさ」

「し、しかし……」

「お前は誰も来ねえか見てろ！」

怒鳴られた兵士は、すぐごと周囲の警戒の為に離れていく。

「いやあーいやあああー！」

邪魔者がいなくなり、下衆な笑み浮かべた兵士は少女の服に手を掛けた。少女は気丈に睨みつけ、必死にもがくが、その非力な腕ではどうにもならない。

込み上げてくる嫌悪感と無力感に、遂に少女の目には涙が浮かぶ。

一体、自分の人生は何なんだろう？

物心ついた頃、少女は母と共に森の小さな小屋で暮らしていた。

少女にとって、最愛の母だった。

優しく、愛に溢れていた。

幼い頃のことなど多くは覚えていないが、それでも母の顔だけははつきりと思い出せた。

少女の最も幸せな日々。

しかし、それも長くは続かなかった。

「奴ら」が来たのだ。

母娘共々、奴ら…ある日急に現れたサルモールに連行され、引き離された。

それからの生活に自由はなかった。

衣食住にこそ困ることはなかったが、部屋に閉じ込められて、出歩くことを禁じられた。勿論母と会うことなど叶わなかった。長い軟禁生活の中で、少しでも心を通わせた者たちは直ぐに何処かへ消えてしまった。

母も、もしかしたら同じ様に。そう想像してしまうたびに少女は枕を濡らした。

そして今もまた、この仕打ちである。

非力な自分の腕では、これから降りかかる屈辱に、固く目を瞑り耐えることしかできないだろう。

…更にその後はどうなるのだろうか？逃亡を図ったのだ。鎖にでも繋がれ、今迄以上に自由を失うことだろう。

下手をすれば、光もささぬ牢獄で暮らすことになるかもしれない。自分は何の為に生きてるのだろうか？

もう全てを失ったではないか。

自由も、友人も、最愛の人も。ついでにこれから純潔さえも……

白い肌に、兵士の薄汚れた手が伸びる。少女は諦めた様に目を閉じる。

目にいっぱい溜まった涙が、頬をスーッと、伝う。

ここは、ここでは一旦諦めて、耐えるしかない。耐えて、耐えて耐えて、そしてまた次のチャンスを狙うのだ。

例え汚されても、汚泥をすすりながらも、抗い続けるのだ。

そう覚悟を固めると、少女は再び自分を抑えつける兵士をキツと睨みつけた。

「へ、へへ……気丈だな。良い顔だ、そういうのがそるんだ。……すぐにひいひい、言わせてやる」

兵士がそう言つて、白い肌に指を這わせた、その時だった。

「おっ」

後ろから、声がした。

しかし兵士は無視する。

また同僚が邪魔しにきたのだろうか、もう止まらない。少々未熟な少女とはいえ、こ

んな上玉だ。ここのところ女日照りだったし逃す手などない。

「…………おい」

また声がする。

「ああ!？」

流石の鬱陶しさに後ろを向く。瞬間、

メコッ

と、拳が兵士のこめかみにめり込んだ。

「ブフツ!!」

間拔けな声と共に兵士は吹っ飛んだ。

少女は何時まで経ってもこない、その瞬間に薄目をあける。

そこに立っていたのは先程とは違う男、巨大な大剣を担ぎ、暗色の外套と鎧を身に纏った戦士であった。

————

…………やってしまった。

エドアードは、木に打ち付けられて泡を吹いている兵士を見て、ただただそう思う。

この鎧は、間違いなくサルモールだ。

こいつらを敵に回してしまえば面倒なことこの上ない。そう思っていたばかりだといふのに。

ファルクリースに向かう為、近道と森を突つ切る為、奥に入つていつたエドアードは、エルフの少女と、それを暴行する兵士達に偶然遭遇してしまったのだ。

兵士達がサルモールそうだということもあつて、最初は素通りするつもりで隠れていたのだが、どういふわけかこんな状況になつてしまった。

騒ぎを聞きつけて、周囲を警戒していたもう一人の兵士も駆けつけてくる。

ここまでやってしまったのだ。

もう色々手遅れであるし、このエルフの少女をこのままにしておくのも無責任というものだ。

(別に、助けるつもりなんてなかったんだがな)

自分でも、自らの行動に首を傾げてしまう。別に、エドアードは悪人でもない。(と、信じている。)が、正義に燃える熱血漢などということもない。

治安の悪い地域、特にこのような内戦地では略奪暴行など日常茶飯事、見かける度に助けていてはキリがない。況して、自らの目的を阻害してまでサルモールと事を構えようなどとは、普段は決して考えない。

つまり、こんな行動は「キャラではない」のだ。少なくとも、エドアードは自分ではそう思っている。

一瞥すると、少女と目が合う。

少女の胸元は軽くはだけており、所々に傷を負っていた。

だがそんな様子でも、その青い瞳には、何処か毅然とした強い意志と、そして、孤独を感じさせた。

「下がってる」

泡を吹いていた兵士が、もう一人の兵士に助け起こされている。

「お前、何者だ！」

俺たちが誰だかわかってるのか!？」

お手本の様な口上に、エドアードは少し呆れる。

(……さつきは他にも仲間がいるみたなことを言ってたな)

あんまりチンタラとしている暇はないか)

気を引き締めて、背からその大きな剣を抜き、ブツと中段に構えをとる。  
すると、あからさまに兵士達の顔が歪んだ。

「お、おい。あれ……」

「ち、違う。あいつじゃ無いはずだ。鎧も、剣の形も違う」

「？」

ヒソヒソと何かを話す兵士達の顔には、心なしか恐怖の色が浮かんでいる。

（この剣を見て？ 確かに、これは威圧にもなりはするが……まあ、いい）

戦いに於いて、恐れられることは優位だ。恐れるなら勝手に恐れておいてくれれば良い。

そう考え、エドアードは地面を蹴った。

完全に腰が引けている兵士二人と一気に距離を詰め、決めにかかる。

しかし、斬りかからんとしたその時、エドアードの足元に矢が飛来した。

「チッー」

エドアードは、口の中で小さく舌打ちをする。

増援だ。思ったよりもずっと早い。

「これはこれは、私どもの連れが、何かご迷惑をおかけしましたでしょうか？」

四、五人の兵士の後ろから、男の声が響く。

黒衣のアルトマー……見覚えがあった。ブルーマにいた、あの司法高官だ。

……ということは、あの馬車の中からした声の主は。

また、少女を一瞥する。

（思ってたより、不味いことに首を突っ込んだか……）

エドアードは内心ため息を吐くが、そこは顔には出さない。予想はしていたことだ。「最近のサルモールつてのは、同族の女子供のケツまで追い回してんのか?」

エドアードの皮肉に、少女のはだけた服を一瞥した司法高官は、頬をピクリと引きつらせた。

「……どうやら、部下が少々やり過ぎた様ですね」

キツと睨みつけられた兵士二人は、血の気がサアツと引いた様に顔を蒼ざめる。

「さて、その方はサルモールが丁重に御守りせねばならないお方です。どうかその方をこちらに返して頂けませんか? 勿論、そちらの部下は、こちらで厳罰に処すことを約束致しますよう」

司法高官のエルフが懇切丁寧な態度で頼むと、エドアードはチラリと後ろの少女を省みた。

「……だ、そうだ。どうする? 俺はこのままお前を、あいつらに引き渡してやればいいのか?」

急に話を振られた少女は一瞬固まったが、すぐに、必死にブンブンと首を横に振った。

「だ、そうだ」

再びエドアードは大剣を構え直す。

またも兵士達が狼狽える様な素振りをみせるが、気にしない。



司法高官は、チツと舌打ちする。

「下等種如きが、調子に乗るなよ。」

先程までの丁寧な口調が一変する。

本性を現したのだ。

「ハッ、そっちの方が似合ってるぜ」

「……やれ」

司法高官の冷徹な合図と共に、兵士たちの放つ矢が、魔法がエドアードに殺到する。

だが、エドアードは全く避ける素振りを見せない。

「避けて!!」

次の瞬間に待ち受ける惨劇を想像した少女の悲鳴が響くも、エドアードはそのまま動かず、矢も魔法もそのままに降り注いだ。

小さな爆発が起こり、ブワツ、と砂塵が巻き上がる。

「馬鹿な奴だ」

司法高官がせせら笑う。

「あ、ああ……」

少女は惨劇に思わず目を覆った。

自分の責任だ。

助けを拒絶するべきだった。無関係だった彼に、与えられた状況に縋るべきではなかったのだ。

少女は今更その考えに至った自分を激しく責める。しかし、

「ぎゃあああああ!」

巻き上がる雪と砂塵の中からのつそりと現れた黒い陰に、すぐ近くにいた兵士が一人吹き飛ばされた。

「何!?!」

驚愕の声上がる。

「安心しろ。腹(・)で殴っただけだ。死んでないぜ。……たぶんな」

なんと、エドアードは無傷で立っていた。

その不敵な言葉に司法高官は顔を引きつらせる。

「射手! もう一度打てえ!」

今度は司法高官も加わって魔法を放つ。

またもエドアードは避ける素振りも見せず、獰猛な笑みを浮かべ、再び構えをとる。そして大剣を大きく振りかぶり、薙ぎはらう様に振り回した。

ブオツ!!

激しい風圧により、またもが砂塵が舞う。

それが途切れると、やはりエドアードは無傷であった。

少女は、いや、そこにいた全員が、しばらく何が起こったのか理解できなかった。いや、目の前で起こったことが信じられないのか。

それもその筈。

なんとエドアードは、その凄まじい「剣圧」で矢の雨を弾き飛ばし、魔法を掻き消したのだから。

「ハ、ハの………！」

司法高官はムキになって何度も魔法を、矢を放たせるも、その度に上手く防がれてしまふ。

「槍だ！槍で刺し殺せ!!」

飛び道具だけでは拉致があかないことを理解したのか、兵士達は弓を槍に持ち替え、エドアードに一齐に襲いかかる。

槍衾がエドアードに殺到する。だが、

「へふっ！」

「ほげっ!!」

良いようにいなされ、逆に反撃を受ける。

そんな攻防を幾らか繰り返した後、

「……そろそろ潮時か」

全員を始末して目撃者を無くするのがベストなのだが、これ以上の増援が来ないとも限らない。それは避けたいのがエドアードの考えだった。

それに増援が来ずとも、1人でも討ち漏らさないと限らない。ならば、恨みを買わずに済むように、被害を与え過ぎない程度に相手をしてから撤退するのがベターな選択だろうか。今までの攻防で1人も（たぶん）殺していなかったのはそういうことだ。

そして、エドアードは少女を、片手でヒョイと力強く抱え上げる。

「きゃっ」

「行かせると思うか！」

再び矢が飛ぶも、大剣を盾にする様にして上手く防ぐ。すかさずエドアードは、バツクパツクから「玉」を3、4個取り出し、放り投げる。すると玉から白い煙が上がり、森に薄くかかり始めていた霧と共に、視界を阻害する。煙幕だ。

「くそ！原始的な手を使いおつて!!」

エルフ、特にアルトマーは魔術の扱いに長けており、小手先の幻惑魔法などはそう効果がないだろう。

だが、逆に魔術に過信し過ぎている部分があるのだ。

そういつたためか、対エルフに於いては、案外こういつた原始的、物理的な攪乱手段

が効果を發揮しやすい。

案の定、矢や魔法が四方八方に飛かって大混乱といった様子だ。

「おい、お前。振り落とさるなよ」

「こう日に何度も！おのれえ!!」

後ろでサルモールの怒号が響くが、

エドアードは後ろの混乱を尻目に、そのまま少女を抱えて走り出した。

「お前じゃないわ!」

少女は揺れるエドアードの身体に、しっかりとしがみつきながら叫んだ。

「あ?」

「名前!……私の、名前!!」

少女は目を爛々とさせながら、強く主張するように言う。

「……ノア!私の名前は、ノアよ!」

あなたは!」

「……俺?」

「貴方の名前!まだ聞いてないわ!」

少女の強い主張に、エドアードは少し沈黙してから、結局名乗った。

「……エドアード。俺は、エドアードだ」

無愛想な上にロマンチックさの欠片も無い、担ぎ上げられる様な抱かれ方にほんの少しの不満を覚えつつも、少女は——ノアは、ある予感を覚えていた。

自分にも来たのかもしれない。

物語の様に、外に連れ出してくれる存在が。

……そして、冒険の始まりの時が。

## 第5話 「支度」

広場を埋め尽くす出店、ガヤガヤと行き交う商人、買い物をする兵士達。

ヘルゲンの街は相変わらずの好景気に包まれていた。

「わあ……」

初めて生で見る活気に、ノアは思わず感嘆の声を上げてしまう。

ノアはスカイリムへの旅程で幾つかの都市に立ち寄りはしていたものの、基本的に外を出歩くことなど出来ず、小さな窓から眺めることしかできなかつた。そんなノアにとつては、行き交う人々、出店、売り物、その全てが興味の対象なのだ。

森を抜けた二人は簡単に傷の処置を済ませて、一度ヘルゲンへと戻ってきていた。

しかし街への興味は別にして、ノアとしてはサルモールのことが気になるので、さつさとこの辺りから離れた方が良いように感じていたのだが……

「こつちに來い」

エドアードの無愛想な声が飛ぶ。

この通り、さつきから無愛想に幾つか言葉を発する程度で何を聞いてもあまり反応を

返してはくれない。しょうがなく、大人しくエドアードの後を付いて歩く。

そんなこんなでしばらく歩いてみると、道行く者達の視線が自分に集まっていることにノアは気がつく。

「ね、ねえ。」

自分は何か変なのか？

ノアにとって街を歩くというのは初めてのことだ。こうも注目されると流石に気にしてしまうし、何か無作法をしてしまったのかと不安になる。

「まずはその格好を何とかする」

「あっ」

……忘れていた。

ノアは改めて自分の格好を見てみる。

そういえば薄い服を一枚を見に纏うのみだった。

確かにノルドでもないのにこんなふうなスカイリムの気候を無視した様な格好では目立つだろう。

思い出したように寒さを感じ始める。さっさと服の一枚でも着なければ凍えてしまいそうだ。

……しかし、それにしたって、ここまでジロジロと人を見るのは失礼ではないだろう



か？　とも不満を覚えるのだが。

あまりに視線を集めるので、やっぱりノアには気になってしょうがなかった。

しかしここで一つ補足しておく、この時ノアが集めていたのは、ただその格好への奇異の視線のみではない。

エルフは白金戦争以来、スカイリムではあまり歓迎されないとか、諸々の理由もあるのだが、何よりその容姿故である。

白く柔らかそうな肌に薄く朱のさした頬。ぶつくりとした可愛らしい唇。人形のように整った小さな輪郭。少し先がカールした流れる様な金髪。そして大きく吸い込まれる様な青い瞳。

まだ幼さを残した華奢な蕾ではあるが、それは逆に将来に咲き誇るさらなる大輪の華を夢見させる。

そう、ノアは美しい。非常に美しいのだ。

エルフが歓迎されぬスカイリムに於いても、男達が無視できぬ程に、女達は嫉妬もできぬほどに。

そんな見目麗しい少女が、乱れた薄着でゴツイ戦士に連れ回されているのだから、目立つことこの上ない。

「お人形さんみたい」

「でもあれエルフだぞ？」

「寒くないのかしら？」

「あの男、エルフとはいえ、まさかあんな子供を……」

なんだかヒソヒソとした話し声が聞こえてくるが、ノアにはよく聞き取れない。傷の痛みのせいとかそれとも羞恥のせいか、ノアは顔が熱くなってきた気がした。

さっさと先を歩いて行ってしまうエドアードを慌てて追いかけた。

エドアードは服を買える店を探し歩いていた。

彼も善人でないとて鬼畜ではない。

一度助けておいて、そのままポイと放り出すつもりもなかったし、少女を薄布1枚で連れ回すわけにいかないことくらいもわかっている。

エドアードがチラリとノアを見ると、恥ずかしそうに身を小さくしているものの、それでも周りの店などに興味深々といった感じだ。あの様子だと、おそらくは今まであまり自由のある身分ではなかったのだろう。

しかし、グズグズと露店などに寄ってやっている暇は無い。

年相応に目を光らせるノアにお構いなしに、エドアードはさつきと人混みを通り抜けていく。そして一件の店の前で足を止めた。

レディアント装具店。

ソリチュードに本拠を構え、スカイリムでも中央の流行を抑えていて女性人気の高い服屋だという。ヘルゲンの好景気に乗じて進出してきたのだろうか。ソリチュードとヘルゲンはスカイリムの北端と南端だというのに。その商魂にエドアードは感心する。

「らっしやーい……」

しかし、店に入ると気だるそうな男の店員が、気だるそうな声でエドアードたちを出迎えた。何ともやる気がなさ気だ。他に従業員は見当たらないし、この店の主なのだろうか。

店主と思われる男はエドアードを一瞥するなり、また更に気だるそうになった。

「傭兵の方ですか、それとも帝国の兵士の方ですか、でもこちらには鎧なんてありませんよ。もちろん剣もね」

男は死んだ目をしていた。

「ああ……もう嫌だ。ここのとこ毎日こんな客ばかりだ。売れるのはオツさんの下着の替えくらい……あねさん達はとつとつとソリチュードに引き上げちまうし……」

更に、ボソボソと愚痴をこぼす。

好景気に色気を出して出店してみたものの、アテが外れてしまったのだろう。今のヘルゲンは賑わってはいるものの、その大半は内戦への参加を目的とした傭兵、駐屯する帝国兵によるものだ。男臭い戦士とそれ用の商人の集まる街で、オシヤレな服を買い求める物好きなどそういるはずがない。商魂先走った的外れな出店計画だったというところだろうか。

とはいえ、実は店自体はそれなりに繁盛しているのはしているのだが。来るのは日用品の安物下着を買いに来る戦士や住人ばかりで、高価な服やコートなんて少しも売れやしないというだけで。

しかし店主も服屋の端くれ。美意識は高い。大量のおっさんに大量のパンツを売りに遥々ヘルゲンにきた訳ではない。できることならオシヤレを求めて来る客を相手にオシヤレを売る商売をしたいのだ。そして贅沢を言うならば、服に彩られる者の器量が高ければ尚良い。

そんな店主からしてみれば、コテコテの戦士風なエドアードなど、またか、という感じなのだろう。まさにお呼びでないのだ。そのやる気のない顔には、脳筋が一体何を買いに服屋に来たんだとでも言わんばかりの失礼な態度が滲み出ている。

だが、

「そつちの一枚適当に見繕ってくれ。一番安いのでな」

店主はエドアードの後ろから店に入って来た者を見た瞬間、眠そうな目を大きく見開いた。

強面の戦士の後ろから、キョロキョロと周りを見回しながら店に入って来たのは、見たこともないくらい可愛らしいエルフの少女ではないか。

「……そちらのお嬢様が、服を！ お求めですか！」

先程の気だるそうな顔に一瞬で生気が宿り、ガタン！ と鼻息荒く椅子から飛び上がる。一番安いのも、という言葉は店主の頭からは吹き飛んでいた。

そう、店主にもやっとおっさんのパンツを売る以外の仕事が舞い込んできたのだから。

早速店の奥に駆けて行くと、パーティにでも着ていく様な服を何着も持ち出してきた。

「どの様なお召し物をお探しでしょうか!? 御晴れ着などでしたらこちらの様な……」

「……違う。こつちのには旅の防寒具を買いに来たんだ」

エドアードは興奮した様子でペラペラと商品説明を始めようとする店主に釘をさす。

「……ああ、ああ！ これは申し訳ありません！ 少々お待ちを！」

今度は店の奥からコートを1着取り出してきた。高級そうな黒地に白いボタンとラインがあしらわれた可愛らしいコートであった。スカイリムなどでは余り見ないタイ

プの服で、強いて言うのならシロデイルなど流行っているものに近いだろうか。

モノとしては相当に良いものだというのがわかるのだが……やはり見るからに高そうだ。

とうか、スカイリムじゃこんな洗練されたデザインの服は目立つ。

「これ、高いんだろう？」

「いえいえ！ お値段は普段よりかなりお得になっておりまして、たったのセプティム金貨一枚とレマン銀貨8枚でございます！」

(……やっぱり高い)

エドアードは心の中で愚痴をこぼす。今の手持ちではそう気軽に手を出せる値段ではない。

しかし、街中見渡しても女子供の服を売っているのはここくらいだ。こんなものしか売っていないのなら、あとは宿屋か民家でも交渉して、町娘のお古でも買い取りにいくしかない。

「そういうえば、ちよつとこれ見てみて欲しいんだけど……」

何かを思い出した様に、唐突にノアが口を挟んでくる。そして、パンパンに膨れていた小さなポケットから小袋を取り出してみせた。

「お金とは少し違うけれど……これって使えるのかしら？」

「こ、これは……！」

またも店主が目を大きく見開く。

ノアが小袋から取り出したのは、宝石に細かな細工が施された数々の宝飾品だ。

「と、当店は宝石類の販売買い取りも致しておりますが……」

「ならお願いしていいかしら？」

「し、しかしこのヘルゲン店舗では、金貨の在庫が少々不足しております。銀貨での買い取りとなると、この全てを買い取るのは少々難しく……3つほどでしたら金貨で買い取ることができるかと」

宝飾品に殆ど知識のないエドアードから見ても、それらが高価な品だということは一目でわかる。

普段からそれらを扱うものからすればなかなかのものらしく、それをこんな少女がジャラジャラと持っていることへの驚愕と羨望がひしひしと伝わってくる。

「なら、それで良いわ」

ノアは軽く返事をする。

「で、ではそこで鑑定をお待ちください」

そそくさと店員は店の奥に引つ込んでいき、しばらくして戻ってくる。

「鑑定の結果なのですが、この宝飾品等はセプティム金貨26枚で買い取らせていただ

いてもよろしいでしょうか？」

「に、26枚だと？」

エドアードは思わず声を上げてしまった。金貨26枚分とは、一般市民が年間必死に働いて稼ぐよりも多い金額だ。女のノアならば、慎ましく暮らせば数年は不自由なく暮らせるだろう。それも宝飾品はこれだけではないのだ。全て売れば一体幾らになるのか？

（おい、これ、何処から持ってきた？）

何を驚いているのかとキョトンとするノアに、店主に聞こえない様に小さな声で話す。

（サルモールから逃げてくる時に、今までにくすねてた分と一緒に盗ってきたやつだ。役に立つかなって思って）

「あの、お客様。先程も申し上げたのですが当店少々金貨が不足しております……。

そこでご相談なのですが、金貨24枚お支払いし、先程のコートとその他のもの計金貨2枚分お買いの頂くというのはいかがでしょう？

もちろん、こちらの都合ですので勉強させていただきました……」

チラリとノアはエドアードの方を伺ってきた。

エドアードは少し悩む。



目立つ格好など以ての外だ。……だが、ただ歩くだけでもノア的美貌は物凄く目を惹く。街中で既に多目立ちもしたことだし今更なのだ。それに、どうせ自分がノアの面倒を見るのは一先ずの安全圏に連れて行くまでだ。そう決めている。それまでは守るが、その後は知ったことではない。

「お前の金だ。好きにしろ」

嬉しそうな表情を浮かべたノアは商品を選んでいく。

しかし、少女がサルモールに護られてこんな僻地に来るなどというだけでも怪しいというのに、次にはこれだ。

ここは一般人ならば残りの釣り銭は銀貨での支払いを求めらるだろうが、高いコートを買った挙句に他の高級な商品まで買い始めた。金貨の一枚の価値がどうかはまるで気にしていないのだろう。

この少女は一体何者なのか？

市井を観察する様子からして明らかに浮世離れており、この今の様子を見る限りは金銭感覚がぶつ飛んでるといよりは「無い」といった感じだ。それに日常的に豪華な宝石や見事な装飾の小物に囲まれて過ごしていたようなことも言っている。

(サマーセット貴族の子女？ いや、サルモールが権力を握って以降貴族は力を失い王

族は追放されたはずだ。……でも、それなら色々納得がいくのも確かなんだが)

やはり、サルモールからの追っ手が気になる。この街から早く離れることを優先すべきではあるのだが、落ち着ける場所に着き次第、事情を聞くべきか。

短い付き合いになるだろうとはいえ、自分が何に首を突っ込んでしまったのか、少々面倒だが知らぬ振りをするわけにもいかなくなってきた。

## 第6話 「スカイバウンド監視所」

「ありがとうございますー！」

結局、ノアはコートだけでなく靴や下着類、それを詰める小さなバックパックなどを購入した。

金銭感覚が無いとは言ったものの、買った物を見れば少々高くとも一概に悪い買い物だったと言いつれないだろう。

店を出て空を見ると、僅かに日が傾いてきていた。

……やはりそろそろ街を離れなければならない。

エドアードにはやはりサルモールの追手が気になってしょうがなかった。

エドアードは足早に店を後にしようとする。すると、

「あ、あのー！」

ノアが何か言いたげな様子でエドアードを呼び止めた。

「あの、まだ言つてなかったんだけど、さつきは……助けてくれてありがとう。本当に危ないところだったわ。もしエドアードが来なかったら私……！」

もしエドアードが来なければどうなっていたか。ノアにとって、そんなことは想像し  
たくはないことだった。

馬車の中に鎖で縛りつけられるだけならばまだ良かっただろう。だが、彼女を捕まえ  
に来たあの兵士たちがしようとしていたことは……

ノアはそういつたことに明るくはない。しかし、自分が何をされようとしていたのか  
は女としての本能が知っていた。ノアは身震いし、震える腕をぎゅつと抱く。

「だから、貴方には最大限の感謝を捧げます」

何処で習ってきたのか、ノアは気品のあるような作法でコートの裾を摘んで礼をす  
る。

「……俺は別に——」

「いたぞ!!」

エドアードがそれに答えようとした時、ガシャガシャと鎧の立てる音と共に怒号が響  
いた。サルモールに追いつかれたのだ。

「チツ……いくぞー!」

「キャツ!」

エドアードは、ノアをひよいと担ぎ上げ走り始める。

「待て！ 貴様ら！」

「待てと言われて待つ奴がいるか」

サルモールが後ろで叫んでいたが、一切合切無視して遁走する。街中で戦うわけにはいかない。

「ちよつと！ またその運び方なの!?!」

耳元でノアの抗議の声がキンキンとしているがエドアードはそれも無視する。人混みに紛れれば逃げ切るのはそう難しくないだろう。

「おのれ、もう逃がさんぞー！」

しかし、雷撃がエドアードの側を掠めた。

街中だというのに、サルモールは魔法を放ったのだ。

「……バカな奴らだ」

だがエドアードは少しも慌てない。それどころか、しめたと言うようにニヤリと笑った。何故ならサルモールは自ら墓穴を掘ったのだから。

「てめえら、何してやがる!?!」

同じように魔法が掠めたらしい男が大声で叫んだ。

ここは、スカイリム。サルモール大嫌いなノルド達の巣窟。そして戦争を求める荒くれども、血の気の多い傭兵が集まるヘルゲンの街。

帝国軍の駐屯地とはいえ、喧嘩の口実があれば簡単に火はついてしまう。

「サルモールが街で魔法をぶっ放してやがるぞ!」

「人様の土地に来てまで調子に乗りやがって!!」

「な、なんだお前らは!? 邪魔をするな!」

殺到し始めた荒くれ共に囲まれ、サルモール達が狼狽える。衛兵達もそれを面白そうに眺めていた。

街中での魔法使用は基本的に違法行為だ。帝国兵達も普段から気に入らないサルモールに仕返しをするチャンスと、むしろこっさり荒くれどもの中に加わる者さえいる始末だ。

「おのれ、おのれ下等種共め! 貴様ら全員連行するぞ!!」

「てめえら殴れるなら安もんだぜ! だいたいてめえらは犯罪者だ! 臭い飯食べさせてやる!!」

「連行できるもんならやつてみやがれ! ストームクロークやホワイトランまで追って来れるんならなあ! あっちでも仕事口なんざいくらでもあるんだぜ!」

「スタアツプ!! 貴様ら何を言っている! ストームクロークへの参加など許さんぞ!」

エドアード達はその大喧騒に紛れ、さっさとヘルゲンの街を脱出した。

「どこもかしこもサルモールだらけか」

ヘルゲンを飛び出したエドアード達はしばらく逃げ続けたものの、めぼしい道は全て塞がれてしまっていた。サルモールが手を回したのだろう。

（できればあの道は使いたくなかったんだが……いや、他に方法は——）  
「ちよつと！ そろそろ降ろしてよ!!」

エドアードが悩んでいると、担ぎ上げられたノアが足をバタバタとさせて抗議を続けていた。

「いいから黙ってろ」

「ひゃあ！」

パンツとエドアードがノアの尻を叩くとノアは変な声を出した。

「あ、ああ、あなた！ レディーのお尻に、なんてことすんの!?!」

顔を真っ赤にして怒り出すが、エドアードは黙って考え込んだままだった。

実のところ、この窮地を抜け出す方法は用意してあるのだ。そうでなければ例えノア

が凍えたって、ヘルゲンになんて戻らずにエドアードは西の街を目指していただろう。

だが、エドアードはどうしてもその方法を取りたくなかった。何故ならその抜け道は北へ抜けるためのものなのだから。

(……悩んでる暇はないか)

エドアードはようやく決心をつけると、抗議を続けるノアを抱えたまま歩き出した。

「ちよつと！ 聞いているの!?!」

「うるさい、サルモールに見つかるぞ」

「ひゃん!」

あんまりうるさいので、エドアードがまた一つ尻を叩くとノアはまた変な声を上げた。

そして、エドアードはヘルゲンの北に足を向けた。

小さな塔に二人は身を隠した。中に人の気配は無い、もう半ば崩れ荒れ果てているようだった。

「ホント、もうちよつとマシな運び方とかないのかしら。乱暴よ。横暴よ」

そこでようやく地面に降ろされたノアがプンスカと抗議するが、エドアードはそれに反応しない。



「黙ってついてこい」

「……黙れ黙れって、あなたそればかり」

すつかり不機嫌になったノアを連れ、エドアードが奥に入っていくと、錠前で封印された扉の前で立ち止まった。

「中に入りたいの？　でも、鍵がかかっているわ」

「見てろ」

そう言つてエドアードは錠前をガチャガチャと弄り始める。ここの錠前を開けるのに鍵はいらない。ちよつとしたコツがあるのだ。それを、エドアードは知っている。

「……よし」

ガチャリと音を立て、錠前が取れた。

「な、なんで？」

「……昔、ここには良く来ていたんだ」

「昔？　……あつ、待つてよ！」

ノアが疑問符を浮かべるが、エドアードはそれを無視して中に入っていく。

中は埃っぽくてかび臭くて、ノアは中に入るなり顔をしかめた。それに扉から差し込む明かり以外は真つ暗であつたから、入り口の辺りから中に入るのを躊躇してしまう。

しかしエドアードは慣れた様子で、どこに何があるかわかっているようにあたりを物

色しだすと、棚からランタンを取り出した。

カツカツと、懐から取り出した火打ち石を擦る音がしたと思つたら、すぐに暖かな明かりが灯った。

「さつさと閉めて門を止めろ」

「わ、わかつてるわよ」

ノアが慌てて扉を閉めると、室内はランタンの灯りに照らされるのみで、より薄暗く不気味なふうになった。それにカビ臭さも一層増した気がする。

「ね、ねえ、ここでどうするつもり？」

部屋の中を静かに見つめて動かないエドアードに、ノアはほんの少し不安を覚える。今更どうにかされるとも思っていないが、つい先ほど乱暴されかけた経験からか、こんな暗く狭い空間に男と二人きりという状況は妙にノアを緊張させた。

「……………ちだ」

しばらく動かなかったエドアードは、そう言つて更に奥へと入つていった。

ノアは内心でホッと息を吐いていた。

エドアードは多少ぶつきらぼうだが、そんな男ではない。わかっている。出会つてから間もないが、ノアも、もう最低限の信頼はしている。ただ……

ノアは、ギユツと袖の辺りを握りしめ、嫌な思い出を頭の片隅に押し込んで、エドアード

ドの後を追った。

奥まで行くと、下へと降りる階段があった。木製でボロいが、ノアよりずっと重たいエドアードがスイスイと降りていくので大丈夫なのだろうと、その後を着いていく。

下まで降りると、更に奥へと続く通路が現れた。

「ここはなんなの？」

「大昔に帝国軍に打ち捨てられた監視所だ」

ノアの問いにエドアードがぶつきらぼうに答える。それじゃ説明不足だとノアが不満げな顔をしていると、説明を付け足される。

どうやら入ってきた方とは対になる、もう一つの監視所が北側にあるようだ。ここはその地下を繋げるトンネルで、古代ノルド遺跡の遺構を利用して作られているらしい。

「なら、ここを進んでいけば北に抜けられるってことなのね？」

そういうことだと、エドアードが首を縦に振る。しかしノアは何故エドアードがそんなことを知っているのかと疑問に思った。旅人のようなのに妙に地理に詳しい。いや、詳しくすぎる。

「ねえ、エドはこの辺りに住んでいたの？」

トンネルの真つ暗な闇の中をランタンの灯りを頼りに進んでいる道中、ノアが質問する。

「……なんだ、そのエドつてのは？」

エドアードは別の部分に反応した。

「そう呼ぶつてことにしたの」

あつけらかんと言うノアに、エドアードは物凄く微妙な顔をする。気に入らなかつたらしい。

「それより、やつぱりエドつてこの辺りの出身なのよね？ こんな抜け道のこと知ってるし、ノルドみたいだし」

お返しとばかりに渋い顔をするエドアードを無視するノア。そんな凶々しい態度に、エドアードは不満げな顔をして答える。

「……ガキの頃この辺りに住んでたことはあるだけだ。ここはその頃に来たことがある場所の一つだ」

「やつぱりここが故郷なんじゃない。最初から素直にそう答えればいいのよ」  
「お前な——」

すつかり生意気なノアに、エドアードはついに文句を言おうとするが。

「……待て。止まれ」

そこで、ピタリと足を止めた。

「どうかしたの？」

「……人が立ち入った痕跡がある」

「え!？」

地面には複数の足跡のようなものが残されていた。ノアの顔が強張る。

「ま、まさか、サルモールに先回りされたの?」

「バカか。それなら俺たちはとつくに袋の鼠だ」

「ば、バカつてなによ!」

しゃがみこんで地面を調べるエドアードの言い様に、ノアはホツとしたようにしたあとに今度は顔を赤くして怒った。

「……どちらにしろもう少し声を低くした方が良いだろうがな」

大声をあげるノアを、エドアードはギロリと睨みつける。

「わ、わかっている……わよ」

鋭い眼光に、きゆう、と萎んだような声を出してノアは黙り込んだ。……だがそれはどうも少し手遅れだったらしい。

「グルルグア」

「……………へ?」

突如、暗闇の奥に青い光が灯った。

ノアは背後に現れた人影を間拔けな声を出して見上げた。

「——ッ!!」

同時に跳ねるように立ち上がったエドアードが、背中の大剣に手をかけその影に向けて突進した。

ブオツ!! と、解き放たれた鉄塊が、トンネルの湿った空気を薙ぐ。

幅広の大剣はノアの頭の先を掠め、その背後の襲撃者に叩きつけられた。乾いた音と共にその胴体が千切れるように四散した。

「ひ、あ」

ノアは腰が抜けたように、へなへなと足を震わせてその場にへたり込んだ。ギリギリで大惨事は耐えたが、ノアは股の間に、ほんの少し暖かいものを感じていた。しかし自分のすぐ背後には、鉄塊を叩き込まれ無残に飛び散ったもう一つの大惨事があることに思い至った。

「な、なに? こいつ?」

ノアは慌てて振り返るが、背後には思ったようなものはなかった。エドアードが斬りはらった、ノアが人だと思っていた影は乾ききったミイラのような姿をしていた。落ち窪んだ眼窩、そこに嵌るものもない。

どうやら先ほどの青い光の正体は、魔力で作りに出された、失った眼球の代わりのようなものだったらしい。恐らく他の部位も同様か干からびきっているのだろう。

おかげでこうして四散しても飛び散る中身もなかったのだ。

「こいつはドラウグルだ」

狭いトンネル内で剣を振り回したせいで壁にめり込んでしまった剣を引き抜きながら言うエドアード。

彼に言われてノアは初めてピンときた。昔、本で見たことがあったのだ。確か古代スカイリムを支配していた魔術師集団が、自分達の墓を死後にも守るようにと、配下の古代ノルドの死体に死霊術をかけて動くミイラを作ったと。

でも、どうしてここにそんなものがあるのだろうか？

ノアがそう疑問に思った時だった。暗闇の奥に、青い光が灯った。

——ああ、そうか。

このトンネルに利用された古代ノルド遺跡というのは、このドラウグル達の墓の一部だったのだ。それが何かの弾みで起き上がって、このトンネルまで出てきてしまったのだ。

ノアはようやくその考えに至ったが、どうやらそれもまた遅かったらしい。

人魂のような青い光の群れが、次々と暗闇に浮かび上がった。

「どうも俺たちは、とっくの前に袋の鼠だったらしいな」

不敵に笑い呟くエドアード。

二人はいつの間にか、大量のドラウグルの群れに前後を挟まれていたのだ。軽く見積もっても12、3体はいるだろう。

「きゃっっ！」

もう今日何度目かわからないが、ノアはエドアードに担ぎ上げられる。また抗議の声を上げかけるが流石にそれはぐっと我慢した。

エドアードの化け物じみた強さならば、きつとこの状況も切り抜けてしまいうに違いはない。しかしノアがいるために、まず包囲の突破を図ろうとしているのだ。

案の定、包囲の薄い前方を狙ってエドアードは突進していった。片手で大剣を振り回し突破口をつくると、とても重い装備とそのついでに子供を一人担いでいるとは思えぬ速さでドラウグル達の隙間を駆け抜けていく。

「——ッ」

しかし、そうも上手くはいかない。ドラウグルの中には武器を携帯している者もいたが——何より、魔術を使いこなす杖持ちドラウグルが邪魔になった。

突如飛来した尖った氷柱を、剣を盾にするようにして防ぐ。その間にドラウグルの一体に外套の端を掴まれ足を止められた。

「ゲッ、ゲッ、ゲッ」

ドラウグルにも感情はあるのか、エドアードを嘲笑うかのような声を出す。エドアード



ドはチツと舌打ちをついてまた剣を一薙ぎしようとするが、やはりこの狭いトンネルに大剣は向かない。剣が壁につつかえその動きを止めると、そこを狙ってドラウグルが殺到してくる。

「——!?!」

しかしそこで、パシユンツ！ と弦を打つような音が響いた。

次の瞬間にはエドアードの外套を掴んでいたドラウグルの頭に、ちようど吸い込まれるようにボルトが突き刺さった。

「やったー!」

エドアードに担がれたノアが歓喜の声をあげる。

いつの間にかエドアードの外套の中を漁っていたノアが、小型クロスボウを取り出して援護射撃したのだ。

「……よくやった」

思わぬ援護により拘束を解かれたエドアードがぼそりと呟いた。思わぬ言葉に、ノアは少し得意になってエドアードを見るが——一瞬で興奮が凍りつく。

「よく、掴まってる」

エドアードは、犬歯を剥き出しにしていた。そして獰猛な笑みを浮かべていた。ドラウグルでさえその殺意殺気を感じ取ったのか、一瞬、怯んだように見えた。

「振り——落とされる、なよ」

ノアはハッと我に返ると、咄嗟にその身体に強くしがみついた。

そして、エドアードは大剣を両手で握り直す。

「お お お お お !!!」

鉄塊が、振り回された。

ゴウツ!! と鉄塊が竜巻のように回転すると、殺到するドラウグルが木っ端のように吹き飛ばされる。

壁につつかえるだとかは、本気になったエドアードの前には意味を為さなかった。鉄塊は殆ど減速することなく、壁ごと叩き斬りながら嵐が吹き荒れる。

ノアは必死にその身体にしがみついて耐える。吹き荒れる鉄塊の嵐が一回りもすると、7、8体が一気にその墓守りの役目を終えることとなった。

そして——

パラパラと、砂埃が天井から落ちてくる。

エドアードの凄まじい一撃に、古いトンネルは耐え切れなかったのだ。

やがて轟音を立てて、土砂がエドアードたちとドラウグル達とを隔てるように落ちてくる。

「お返しだ」

エドアードは、回転が止まりフラフラと目を回すノアの手からクロスボウを奪うと、手早く次弾を装填してボルトを撃ち出した。

ボルトは降り注ぐ土砂の隙間をすり抜ける見事な軌道を描くと、最後つ屁とばかりにエドアード達に狙いをつけていた杖持ちの頭へと突き刺さった。

そして、ドラウグルの集団とエドアード達の間は、完全に隔てられた。

「危なかったけど、何とかなつたわね！ 私のおかげで！」

崩落が落ち着いたあたりで、興奮の治らぬ様子のノアがドヤ顔で自らの手柄を誇り始めた。しかし、その足はまだ微妙にプルプルと震えていて全く格好はつかない。

「チビるのを我慢できるようになってから言うんだな」

「なつ——!?!」

上手く誤魔化せたとばかり思っていたノアは顔を真っ赤にさせる。怒りの抗議をしようとしたところで、ポンとエドアードに何かを放り投げられて慌てる。

「わ、わわっ」

慌てて受け取ると、それは先ほどの小型クロスボウだった。

「自分の身は、自分で守るんだな」

エドアードはそれだけ言った。

彼としては護身の為に渡したに過ぎないが、ノアにしてみれば少し違ったらしい。何故だかほんの少し嬉しそうにはにかんで、預けられたクロスボウを抱きしめた。

「そういえば、良かったの？ これ」

そこで思い出したようにノアが言った。埋まつてしまった道のことだ。エドアードにとつて、ここは多少思い入れのある場所なのではと思つたのだ。

「良かったも何もない。それに、これでこの道から追跡されることもないんだ。

……さあ、さっさと行くぞ。この先をサルモールに塞がれたら、俺たちは今度こそ終わりだ」

エドアードは崩れた道をしばらくジツと見つめると、やがてぶつきらぼうにそう言つて、さっさと先を歩き始めた。

しかし、ノアにはそのぶつきらぼうな表情はどこか寂し気に見えた。

## 第7話「事情」

ギィ、と音を立て扉を開けると、ようやくランタン以外の光が暗闇を切り裂いた。

暗闇になれた目にチカチカとチラついて、二人は貧血になったような感覚に襲われる。

「わあー……」

外だ。

トンネルに入る前には傾きかけていたくらいの日が、既に綺麗な夕焼けとなっていた。崖の淵に建設された北監視所は見晴らしが良く、ノアは興奮気味になってエドアーのマントを引つ張った。

「ねえ、ねえ、見て！ 夕焼けよ！ ……空よ！」

エドアーは、それに少しめんどくさそうに答える。

「このくらいの場所はスカイリムにはいくらでもある」

「うん。……でも、私は知らないの」

しかし、それでもノアはため息つくように言った。軟禁生活の長かった彼女からして

みれば、こういった光景の1つ1つが貴重なのだろうか。興奮が徐々に静かな感嘆へと変わっていったようで、しばらく静かに夕焼けを見つめ続けた。

かく言うエドアードも、そんなノアを見ていると少し感慨深い気持ちになって、つい目の前の光景に見入ってしまう。

「これが、スカイリムなのね……」

しかし、次の瞬間にはギョツとさせられた。

ノアのぱっちり見開いた青い目から、大粒の涙が溢れ落ちていたのだ。

「お、おい？」

「……違うの。夕日が綺麗で、それで、でも……」

ノアはそこで言葉を切って、静かに夕日を眺め続けた。夕日に照らされ、頬に涙を伝わせるその姿が、まるで美しい宗教画のようにさえ思えた。

しかし、そんな奇跡的な光景も長くは続かなかった。ノアはヒックヒックとえずくうになると、やがて決壊したように、わんわんと泣き始めたのだ。

今日一日にあったことが、今更になって津波のように押し寄せてきたのだろう。ノアは掴んでいたエドアードの外套に縋り付くように顔を埋め崩れ落ちた。

エドアードは抱き寄せも突き放しもしなかったが、ただ黙ってそこに立っていた。

結局、二人はそこで隠れるように野宿することになった。

古びた監視所の内部は吹きさらしのようになっていて、寒さを凌ぐには物足りない。だが風雨を凌ぐには十分なので贅沢は言えなかった。

パチパチと焚き火の爆ぜる音が監視所の中に響いていた。あの後、一頻り泣いたノアは泣き腫らした目に少し憂いを帯びた表情で、静かに、ジツと炎を見つめていた。

「……もう何年前かしら」

エドアードが口を開くタイミングを伺っていた時だった。

ポツリと、ノアが呟いた。

「私はヴァレンウッドの森にお母さんと暮らしてたの」

エドアードの疑問を察してなのか、それとも聞いて欲しかったのか、ポツリポツリと自身の身の上の話を始めた。

「私にはお父さんがいなかったわ。住んでたところも小さな小屋みたいなところだった。ポロくて、狭くて。

……でも、なんの不自由もなかったの。お母さんが一緒だったもの」

ノアは母との穏やかな暮らしを、覚えている限り語った。

森で草花と戯れ、遊び疲れたら母の膝の上で眠る。子供らしい、愛に溢れた日々。森での思い出を語るノアは幸せそうで、空気など読めなそうなエドアードもその時ばかりは静かに聴いてやっていた。しかし。

「……でも、あいつらが来た」

そこで、ノアはその綺麗な顔を歪めた。

森で平和に暮らしてノア達母娘は、ある日突然現れたサルモールに連行され、引き離されてしまったのだ。

そこからの暮らしは、とても不可解なものであったという。

サマーセットに連行されたノアは軟禁され、母を含むあらゆる人間との接見を制限された。しかし、それ以外には殆ど不自由のない暮らしを与えられたのだという。

部屋は軟禁部屋とはいうものの豪華な装飾で彩られており、着る服も食事もまるで王侯貴族のようなものが用意された。娯楽などは許されなかったというが、監視も兼ねた侍女によりマナーや刺繍などその他貴族女性を育てるような教育も施されたという。

「何故奴らがそんなことをする？」

エドアードにも、あまりに不可解であった。

ノアが何かサルモールに都合の悪い存在だとしたらさっさと殺してしまうはずだし、そうでなくとも金のかかる暮らしや教育を与える必要などないはずだ。ノアが追放さ



れたという王族の係累であったりする可能性も考えたがそれなら尚更邪魔な存在だろう。国内のサルモールの反対勢力の旗頭になりかねないし、軟禁程度で済ますにしても、もっと粗雑に扱われるだろう。

「……わかんないわよ。こつちだつてぜんぜん意味がわからなかつたわよ。お母さんと  
は会わせて貰えなくて、何年も経つていつて……」

エドアードが思考と想像力の迷宮に囚われそうになつたところで、ノアはまたうずくまるように泣き出した。

「私、お母さんがどうなつたのかも知らないの。会いたい。お母さんに、会いたいよ」

エドアードはもつと聞きたいこともあつたが、スンツスンツと漏れ出る嗚咽が、それ以上のことを聞くことを憚らせた。

エドアードは内心でため息を吐くしかなかつた。

やがてノアは泣き疲れたように眠つてしまつた。

エドアードは見張り番をしながら、これからのことを考えていた。

(だいたいこの事情はわかつたが……これから、どうする?)

エドアードは内心サルモールも子供一人に逃げられたくらいなら追跡を諦めてくれるのではと期待していた。しかしノアの話を聞く限り、どうもサルモールは追ってくるような気がする。ノアがサルモールの何らかの機密に関わる存在であることは間違いないだろう。それも、外に出るのが都合が悪いような。

……下手をしたら、サルモールの要請で帝国からも追われる可能性もあるかもしれない。

その可能性を考えると、やはり早く帝国の勢力圏内から出ることを優先すべきだろうと思ひ至る。ストームクロークにしろホワイトランにしろ、他の独立勢力はどこも反サルモールの立場を取っているのでそう簡単に追っては来れまい。このまま道なりに北に抜け、独立勢力のホワイトラン地方に行くべきなのだろう。

「ふう……」

これからの方針が決まったところで、エドアードは少しため息を吐く。

似合わない同情などして気まぐれに助けたら、とんでもないことに巻き込まれてしまった。殆ど宛のない旅で急ぐことはないとはいえ、自分にはやるべきことがあるという事に変わりはないというのに。

この後悔もまた、エドアードの内心だった。エドアードは舌打ちをする。

ノアはホワイトランに着いたら置いていけばいい。そこまでしてやれば義理は果た

したことになるだろう。だがその後も追われる身になってしまったことに変わりはないのだ。それに、ノアを送り届けるまでは旅の速度も落ちてしまいうだろう。

「……つくづく、嫌になる」

何に對して言ったのか、エドアードは天井を仰ぎ見るようにポツリと呟いた。

その声は煌々と燃える炎に焚べられたように、爆ぜる火の粉の音に掻き消された。

「……………ん」

翌朝、差し込む明かりにノアは目を覚ます。ぼんやりとした頭で身体を起こすと、ハラリと布が肩から落ちた。……エドアードの外套だ。

寝惚け眼で辺りを見回すと、出入り口付近で座ったまま眠るエドアードがいた。殆ど寝ずの番をしていたことを察して、ノアは少し申し訳なく思った。昨日は言うだけ言つて、さっさと自分だけ眠ってしまった。

——そして、このマントに縫り付いて泣いてしまったのだ。

途端に、ノアは首の下から頭の先まで何かがせり上がってくるようになって、顔が真っ赤になった。

(ち、違う違う！ そういうのじゃないんだから！ エドって、ぶつきらぼうだし！ 乱暴だし！ ……お尻叩くし！)

ノアはブンブンと顔を振って目を覚ます。しかし自分にかけていたマントのことを思い出してしまう。

(……でも、昨日は助けてくれたんだよね。たまにこうやって優しいし……)

チラリとエドアードの方を見ると、静かに目を瞑ったままだ。寒くないのかと思うが、鋼のような肉体がそれを跳ね返しているのだろう。

その逞しい肉体を見てノアはまた少し熱に当てられたように頬を染めると、ぶかぶかのマントに自らを包むようにする。

(……あつたかい)

意外と臭くないだとか、こんな大きな身体なんだか思っていると。

「……おい」

「ひゃ、ひゃいつ!?!」

声が飛んできて、ビクリと震える。

慌てて出入り口の方を見ると、エドアードが目を覚まして、ジツとノアの方を見てい

た。

「なにをしてるんだ？」

「さ、さささ寒いから！ 包まってもう一眠りしようと思っただけよ！」

「……二度寝してる暇なんか有るわけがないだろう。馬鹿なことを言っただけで、さつさと起きろ」

エドアードはぶつきらぼうに言う、ノアからマントを剥ぎ取ってしまった。

「……もう、なによ！ さあ、さつさと行きましょう！」

内心残念に思っている自分が何とも認めがたく、ノアは怒ったように言う。それからパチンツと一つ寝惚けた顔を叩いて立ち上がった。

「……どうかしたの？」

エドアードは少し意外そうな顔でノアを見ていた。

「いや、何でもない」

エドアードはそう言って立ち上がると、バサリとマントを羽織った。

ノアとの旅は、かなり遅々としたものになるだろう。

エドアードはそう考えていた。旅に慣れていないノアに合わせる必要があるからだ。しかし、ノアは意外にもエドアードに着いてきていた。かなり無理をしている感じは否めないもので、エドアードが折を見て休息を入れる必要はあったが、それでもしつかり歩いていた。

昨晚のことは切り替えているようで、気丈なものだとエドアードは内心で感心していた。

……監視所から直ぐ下の街道に出るためには少し崖を伝う必要があったので、抱えて飛び降りた時は流石にかなりの文句を言ったが。

「お前、この後どうするつもりだ」

昼を過ぎた頃。川のほとりを道なりに歩いていたら時だった。エドアードが言った。

「この後って?」

ノアは意味がわからなかったのかキョトンとする。

「俺がお前を守るのはサルモールの手が届かなくなるホワイトランの街までだ」

「あ……うん………そうよね。ホワイトランまでよね」

ノアはほんの少し落胆を露わにしたような顔をして俯いたが、やがて納得したように言った。まるでお前を捨てると宣告された仔猫のようで、エドアードは少しやりにく

かった。

しかし当然のことなのだ。ただでさえ旅の計画は狂っている。エドアードからすればここまでで十分良くしてやっているのだ。だからホワイトランがどんなにいい街だとしても、美しいエルフの少女が一人で生きていくことがどれだけ難しく、そして碌な末路迎れないことがわかっていても、知ったことではないのだ。

「……そうだ！ お父さんよ、お父さんを探すわ！」

エドアードが誰に言っているのかわからない言い訳を心の中で呟いていると、すっかり沈んでいたノアが途端に明るい顔になって、名案を思いついたように言った。

「お前、親父はいないんじゃないのか？」

「そうよ。でも、昔お母さんが言ってたの。私のお父さんは凄く強いノルドだったって。ノルドなら、きつとスカイリムのどこかにいると思うの！」

エルフの父がノルド、というのは特におかしなことではない。人種が違う場合、子供はハーフではなく母親の人種的特徴を受け継いで生まれるのだ。個人差もあるが父親の人種的特徴の継承は限定的というのが常識だ。

エドアードも、母親がノルドで父親はシロディール地方の一帝国人（インペリアル）であった。髪が黒いのは父のそれを受け継いだのかもしれない。

しかし、ノルドだからスカイリムにいるというのは安直だろうとエドアードは思っ

た。こんな少女がスカイリムで静かに暮らすどころか父親探しの一人旅などすれば、一体どんな目に合うかなど火を見るより明らかだろうとも。

「顔くらいは知ってるのか？」

「ううん。私が生まれる前にしようがない理由があつて離れ離れになつちやつたんだつてお母さんが言つてたわ。でも、いつか必ず会いに来てくれるはずだつて、絶対私たちを見つけてくれるつて言つてた！」

……うん、そうよ。私たち何年も閉じ込められてたし、きつとお父さんも見つけようがなかつたと思うの。

なら、私から迎えに行けばいいのよ！ たぶん私つたらお母さんにそっくりだから、きつと会えばすぐにわかっちゃうもの！

それに、お母さんが捕まつてるのを知つたら、きつと一緒に助けに行つてくれるもの！

ここまで妻と娘をほつたらかした男が、今更サルモールに追われる娘を養つてやるとも、サルモールに攫われた妻の救出に乗り出すともエドワードには思えなかつた。だいたい、ノアはもう何年も母を見ていないというのだ。生存さえ怪しい。

……だがそれを口にしてしまうと、少女の最後の希望を砕いてしまう気がした。

優しい母は生きている、まだ見ぬ父はきつと自分達を愛している、自分にはきつとま



だできることがある、という。

だからエドアードは何も言わなかった。

その無垢を眩しいように思ったからか、それともこれ以上ノアと言葉を交わし聞いていたら、何か変な心変わりを起こしてしまいかねないからか。

「……ああ、見つかるといいな」

「うん！ えへへ」

エドアードはそれだけ呟くと、そのまま静かに歩みを進めた。初めてエドアードから得られた同意にノアの顔が輝いた。

だが、エドアードにはそれが虚勢のように見えて、どこか後ろめたくてたまらない気分になった。

ホワイトランの壁の中には住み心地の良い安寧があつて、それが少女を無謀な幻想から覚ましてくれることを祈るしかない。そう思うしかなかった。

そうして北を目指すこと数日が経った。

道なりに細い街道を歩いていると、二人は川のほとりの小さな村に辿り着いた。

その村の名前は、『リバーウッド』である。

## ※世界観の紹介2 「神々と種族」

神々について

＞光の神 アヌ、闇の神 パドメイ

最も原初の神と言われる。

二人は争いの末に相討つて死んだともされている。

概念に近く、秩序と混沌、光と闇、創造と破壊、停滞と変化、それらの象徴のようなもの、なのかもしれない。

＞エイドラとデイドラ

エイドラとはこのアヌとパドメイが戦った際に流れた血が混ざったものから、デイドラはパドメイの血のみから生まれたと言われるが、エイドラとされる時の竜神アカトシユなどの神々は二人の戦い以前から存在しているような記述もある。

また、定命の次元ムンダスの創造に参加し、不滅の命をロルカーンに奪われた者をエイドラと呼ぶこともあるが、そうでなくともエイドラとされる者もあり、エイドラとデイドラの明確な定義は難しい。

・エイドラ

エルフの言葉で「祖先」を意味する。

エセリウスに住む神々で、定義は色々あるが、基本的に、人やエルフに対して善なる神をこう呼ぶことが多い。

元は不滅の命を持つが、特に定命の世界ムンダスを創造した際にロルカーンの罠に嵌った神々は不滅ではなくなっているとされる。

・デイドラ

オブリビオンに住む神で、イタズラ好き。

基本的に悪神とされており、人の命などを弄んで楽しんだりするが、時に助けとなることもある。

気まぐれで、それぞれが感情のままに動くことが多く、そもそも善悪を超越している存在であり、一括りにしにくい。

――

＞九大神教

第一帝国が定めた九柱のエイドラ神を特に信仰する宗教。

あらゆる民族や地域で信仰されている神々から、それぞれ選ばれている。

元は八大神であったが、第三帝国創始者ダイバー・セプティムが死後に神格化され、九大神となった。これは彼に征服された記憶が新しいエルフ達の反発を買った。

・時の竜神アカトシユ

時を司るといふ神。

その名の通り翼を持つ竜として描かれることが多い。

基本的に人を守ってくれるが、邪竜アルドウインを創り出すなどの失敗もしている。

エルフにとっては太陽神アールエルであったり、カジートにとっては大きな猫の姿をした神アルコシユであったり、神とは信じる者によつて姿を変えるようである。

・アーケイ

生と死、輪廻を司ると言われる。

杖を持った老人の姿で描かれる。

また、元は人間であったと言われる。

生命の理を乱す不死者や死霊術士を否定しているが、実力行使は好まず、対話による解決を追求し、理性と誠実を旨とする。

・デイベラ

美の女神。芸術の神とも言われる。

・ジュリアノス

知識と論理を司る神。顎髭の生えた老人として描かれる。

魔術師ギルドの学生などに信仰されている。

・キナレス

大気と空の女神。かつてドラゴンしか持たなかったスウーム（シャウト）と呼ばれる声の魔法を人に齎し、特にスカイリムのノルドから信仰されている。またの名をカイネという。

・マール

愛の女神。豊穡の女神ともされる。

結婚の際には彼女のシンボルを象ったペンダントを証として渡す文化がある。

・ステンダール

慈悲の神と言われており、身代金の神とも。慈悲のない者に対しては無慈悲らしい。ゴブレットを持った老人として描かれる。

最近では信者がステンダールの番人を名乗り出して人に仇なす不死者狩りを始めている。

アーケイの信者がやるべきだと思う。

が、話し合いを是とする彼の信者には向かないからなのだろうか。

ここは是非とも後述のメリディア様の信者となるべきではと筆者は思う。

・ゼニタール

仕事や商売、交易や農業も司る神。

片手に金床を持った老人として描かれる。

・タロス

第三帝国の開祖、ダイバー・セプティムが神格化された存在。

彼はタムリエル全土を征服し、皇帝となった。生まれながらに声の力、シャウトという魔法を操れる、竜の血脈（ドラゴンボーン）であつたとされる。

エルフの反発により、白金大戦後、九大神から削除された。結構性格が悪い。

ー

> デイドラロード

十六柱の特に強大なデイドラ神。デイドラプリンスとも呼ばれる。

でもこれ以外にも強力なデイドラはいる。

エイドラよりも頻繁に姿を現わすので、比較的身近な神様なのかもしれない。

・アズラ

黄昏と夜明けを司るデイドラであり、ノクターナルの妹とされる。

ダンマー（ダークエルフ）の信仰する神であり、性質は邪悪ではなく、信者に対しては好意的に接しており、多くの知識や加護を与えている。

しかし、過去にダンマーの祖先が彼女を怒らせた際は、呪いで種族ごと灰黒い肌に変えるなど、怒らせると怖い。

支配領域は月影の国（ムーンシャドウ）。

・メエルーンズ・デイゴン

破壊や変化を司るデイドラ。

四本腕の魔人といった感じの姿。

度々、人の世界に侵攻しては返り討ちにあっている。正に魔王と言うべき存在。

数百年前には『深淵の暁』というカルト教団の手引きにより、世界中にオブリビオンへの門を開くなどして攻めよせたが、クヴァッチの英雄（tes3オブリビオンの主人公）や第三帝国最後の皇帝、マーティン・セプティムが呼び寄せたアカトシユによつて撃退された。

その性質は創造神ロルカーンに似通っているが、関連性は不明。

支配領域は、溢れる溶岩の世界、デッドランド。

・ハルメアス・モラ



過去と未来、ありとあらゆる知識と記憶を司る神。また、定命の者の運命の流れなどを見通し操るとも。

星と天から過去や未来を読み解き、知識や記憶を財宝としてその手に有する。また、どんなくぐらない知識でも求める蒐集家かつ、その知識を得るためならば手段を選ばない残忍なデイドラ。他の神と取引や脅迫することすらある。

アポクリファと呼ばれる永遠に知識が集約される書庫のような領域を支配している。いくつもの触手とハサミを持った蟹のような姿をしている。

・モラグ・バル

冒涇と不和の神。又の名を陵辱の神。

ワニか竜のような頭をした男の姿。

唯一、デイドロスと呼ばれる下級デイドラからロードまで成り上がった叩き上げ。しかしそのせいか、他のロードに格下に見られがち。

吸血鬼の真祖を作り出したり、たまに攻めてきたり、常に人に仇なしてきたデイゴンに並ぶ恐ろしい魔王。しかし実は子煩悩なパパ。

支配領域はタムリエルのよく似た荒廃した世界、コールドハーバー。

・ノクターナル

夜と闇を司るデイドラ。

アズラの姉とされており、人の恋人がいたことがあるなど、デイドラの中でも一風変わった存在。

盗賊に信仰されているが、よく盗賊に物を盗まれている。

支配領域は影の国エバーグローム。

・ペライト

竜の姿をしていると伝わるが、オブリビオンの最下層の秩序『ピット』の領域を守ることから、親方と呼ばれているらしい。

管理監視、自然的な秩序を重んじている側面もあるらしいが、イマイチパツとしない。強いとも弱いともされる説がある。

毒や疫病も司るとされる。

・サングイン

快楽を司るデイドラ。

酒が好きで、たまに人に化けてタムリエルの酒場などに遊びに来る。暗い意味での快楽（殺人など）も司っている。

オブリビオンに10万とも言われる無数の小さな支配領域を持ち、その時々目的に合わせて作り変えているとも言われている。決まったような呼び名があるとも管理されているとも言いがたいようで、その支配領域に無理に名を付けるならば『無限の遊技場』

とでもするべきだろうか。

・ヴァールミナ

夢を司るデイドラ。特に悪夢を司ると言われ、夢の王国クアグマイヤを支配領域とする。

・ボエシア

鎧を着込んだ男の姿。

虚偽と謀略の神。殺人、暗殺、反逆や裏切りなど後ろ暗い行為を司る。

強者が好き。

支配領域はスネーク・マウントと呼ばれる塔や迷宮、庭園などが広がる空間。

・クラヴィカス・ヴァイル

契約と対価の神。角が生えた子供のような姿をしていて、犬のバルバスを連れているが、たまに喧嘩して逃げられている。支配領域に名前はないらしい。

・ハーシーン

狩猟を司るデイドラロード。

鹿の頭をした狼を連れた男として描かれる神。狩りが好きで、狩るのも狩られるのも好き。

ウエア・ウルフなどの獣人化する病気を作り出した為、悪神として扱われることが多い。

い。

支配領域は、永遠の狩場ハンティング・グラウンド。彼に魂を捧げた者は死後にここで永遠の狩りに興じる。

・メファアラ

囁きの女公メファアラとも呼ばれる。

曖昧な真実を司るとされ、暗殺結社などの設立に深く関わる。

ハルメアス・モラの妹との説もあるが、両生具有らしい。(そもそもデイドラそのものがそうとも言われるが)

アカトシユが生まれた際に同時に誕生した原初の最強神の一柱で格も高いとか何とか。

支配力は『螺旋の枷（スパイラル・スケイン）』

・ナミラ

古代の暗黒を司り、あらゆる悪霊、邪霊を統べる。また、人に嫌悪される蜘蛛や昆虫、ナメクジなどを好んで使い魔とする。

忌まれる者や虐げられる者を憐れむ慈悲深いデイドラロードである。

しかし、信者は人肉食者が多いのでかなり嫌われている。

支配領域は『削られし空間』（だいたい直訳）である。カジートたちには『世界の裏の

闇』というふうにも呼ばれるらしい。

・マラキヤス

拒絶されし者や追放されし者の守護者。復讐を司る。

トリニマツクと呼ばれるエイドラ神が、ボエシアに敗北し食べられ、拳句にう〇ことして排泄されたことで誕生した。そのような経緯からデイドラでありながらデイドラを憎み、対デイドラ兵器を製造している。そのせいか他のロードから嫌われている。

オークに信仰されており、皆の顔や名前を一人一人覚えていくくらい愛が深い。しかし深過ぎる愛はヤンデレ気味で、厳しさへと変貌することがある。

支配領域は塵に覆われた世界、アツシユピット。

・シエオゴラス

狂気を司るデイドラロード。

白い髭に奇抜な色の服を着た老人。

元は秩序を司るデイドラロード、ジャガルクであったが、あまりに苛烈でうるさかった為に、他のデイドラロードに疎まれて狂気の呪いをかけられて現在の姿となった。

支配領域はシヴァリング・アイルズ。

・メリディア

不死者が大嫌い。命を司るとも言われる。聖なる光とか使っちゃうから、デイドラか

疑問視されている微妙な立ち位置の人。

謎の水晶玉を押し売りしてくる女神。

受け取ると信者にされてしまう。しかし今なら先着一名で光り輝く聖剣が付いてくる、かもしれない。

現在スカイリムには信者が一人もいないようで、絶賛信者募集中。

実は元は後述の魔術神マグナスの娘の一人だったようで、彼がエセリウスに逃げ帰るときに逃げ遅れ置いてけぼりを食らったエイドラ？であった。

本当に微妙な立ち位置の人（もとい神）だった。

その後、星々から漏れるエセリウスの光屈折させ創り上げた『カラードルーム』と呼ばれるキラキラした領域を領地としてオブリビオンに住み着いてデイドラ王となったようだ。

しかし領域のネーミングセンスが少しバブリーに聞こえるのは何故だろうか。

――

>その他の神々

・創造神ロルカーン

時の竜神アカトシユと双璧を為す強大な神。破壊や変化を司り、人の住まう世界、ムンダスを創造した中心的存在と言われている。

しかし、ムンダスを創造した際に協力したエイドラを定命の世界に縛り付け、不死性を奪ったと言われる。

このことから、エイドラ達と大戦争となり、最後は彼らに敗北した。

力の核たる心臓は抜き取られてレッドマウンテンに投げ捨てられ、身体は二つに裂かれた上で双子の月マツサーとセクンダとして封印されたとも言われる。

上記の理由から不在の神とされるが、何らかの方法で、肉体がなくとも、世界に多少の干渉はしているようなことが間々見受けられる。

スカイリムのノルド達には、冥界の神ショールとして信仰されており、勇敢に戦い散ったノルドは、死後に彼の持つエセリウスの領域『ソブングアルデ』に招かれると伝わる。

今作ではイマイチ影が薄いようであるが、実はシリーズの各タイトルで、物語の核心部分で関わってくることが多い不気味な存在。

エイドラともエイドラとも言われる。

・魔術神マグナス

ロルカーンの世界創造に協力した高位のエイドラであり、世界の設計図を作った存在

と言われる。

途中でロルカーンの企みに気がついて、世界にエセリウスに通じた巨大な次元の穴をあけ、すんでのところまで逃げた。

穴は『太陽』と呼ばれており、又の名を『マグナスの涙』とも呼ばれる。

これにより世界には大量の魔力（マジカ）が流入し、魔術が使えるようになった。故に魔術の神と呼ばれている。

・太陽神アールエル

時の竜神アカトシユのエルフver。

しかし、あまりに類似点が薄いため、本当に同一かは疑問が残る。

・ザルクセス

太陽神アールエルに仕える、エルフに纏わる出来事を記す書記官。

ザルクセス神秘の書や、オグマ・インフィニウムなどの著書が確認されている。

――

人種について

基本的には、人、エルフ（マーとも呼ぶ）、アルゴニアン、カジートがタムリエルには



住んでいる。また、それぞれが更に枝分かれした種族を持つ。

他にもツアエシと呼ばれる蛇人などがあるとされるが、基本的にタムリエルでは確認されない。

交配は人と基本的エルフは可能であるが、それ以外は例が知られていないとされている。だが、不可能とも言われてはいない。つまり不明である。

人とエルフなどの異種間の交配で生まれた子供は、基本的には母親の種族を受け継いで生まれてくるので、ハーフという概念はない。

しかし、父親の形質や種族の特徴も幾らか遺伝することがあるようで、どれだけ混ざるかは個人差であると思われる。

異「人種」間の交配でも同様である。

ここでは、主にタムリエルで確認される、または歴史に深く絡む種族を紹介していく。

>人

主に古代にアトモーラと呼ばれる北の大陸から入植したネディック人を祖とすると言われる。そこから広まったものが多くの人種のルーツである。とされている。

なお現在はアトモーラ大陸は寒冷化により人は住めないらしい。

・インペリアル

シロデール地方で最も支配的な人種。白い肌に黒めの色の髪が多い。

能力は平均的な器用貧乏。

商人が多い。気がする。

・ノルド

スカイリムで最も支配的な人種。

金髪に真つ白な肌が多いが、そればかりというわけでもない。

寒冷地に住むせい、異様に寒さに耐性を持ち、極寒のスカイリムを半袖半ズボンで過ごす猛者もいる。

屈強な戦士を好む傾向があり、魔法に対して偏見のかつ脳筋で喧嘩っ早い人種。また内戦などの影響か、差別的で排他的な発言が多いが、義理堅い者も多い。

今作の主人公エドワードなどはこのノルドであり、登場人物にもこのノルドが多い。

・ブレトン

タムリエル大陸の北西、ハイロック地方で支配的な種族。

マン（人）・マー（エルフ）とも呼ばれており、人間にしては魔法を使う素養が結構ある。

そのルーツは、太古の昔に人の奴隷を、古代のエルフが弄んで、大量に子供が生まれたことにあると言われている。

魔法を志す者が多いからか、知的な者が多い。また、著名な料理人はこのブレトンに多く、美食を好むと思われる。

ドラゴンスキンと呼ばれる肌を持ち、魔法に対する耐性を発揮する。

岩のように硬いとする説もあるが、今作では採用しない。ブレトンの女の子の肌は柔らかい、いいね？

・レッドガード

浅黒い肌に黒髪を持つ。

毒に対して耐性を持つと言われる。

ハンマーフェルで最も支配的な種族。

水没して失われた西の大陸ヨクラーダの、ラ・ガダと呼ばれる民族が源流となっており、人の中では珍しくアトモーラのネディック人を祖としていない。レッドガードという名も、ラ・ガダが鈍ったもの、とも言われる。

しかし、ラ・ガダ以前にもタムリエルに渡ってきたヨクラーダ人はおり、ラ・ガダが渡つて来たのはネディック人よりはだいぶ後の時代になる。

ノルド以上に屈強であるが、ハンマーフェルのアリクル砂漠に住むためか、暑い地域を好み、寒いところが苦手。

寡黙な性格の者が多い。

また、アラブ世界によくあるようなターバンを巻いてシミターなどの曲刀を持っていることが多い。

————

> エルフ（マー）

人が渡つたよりも古代、遙か南にあつた（と思われる）アルドメリスと呼ばれる大陸が滅びた際に、タムリエルに入植したと言われる。

自らをエイドラ神の末裔と考えており、祖先信仰という形でエイドラを敬う。だが、エイドラを信仰する種族もいる。

全体的に魔法に優れ、また、寿命が異様に長く、病気などにならないければ、ほぼ永遠に生きると思われる。その反面繁殖力が低く、遅れてタムリエル大陸に入植してきた人に淘汰された種族も多い。

昔はツリ目で面長な者が多いように描かれていたが、近年では設定の変更があつたのか、ESO（エルダースクロールズオンライン）などでは一般的な美形な種族として描かれていることもあり、肌の色なども特徴が薄くなっている。

今作もまちなまな感じで行く予定なので、美形でもあんまりツツコまないで欲しい。

## ・アルドマー

古代にアルドメリス大陸で栄えたと言われるエルフの原種。

彼らが各地方に散った結果、それぞれが環境に適した進化を遂げて、現在の形になったと言われる。

どこから昔までがアルドマーで、どこ以降がそうでないのかイマイチはつきりしない。単に大昔のエルフを括ってアルドマーと指している文献も多く存在する。

実際はもつと概念的な者とも言われており、やはりよく分かっていない。

## ・アルトマー（ハイエルフ）

黄金に輝く肌を持ち、魔法に対して最も高い親和性を持つ。その反面、魔法により受けるダメージも多い。

アルドメリス大陸から渡ってきたアルドマーが、最初に到達したのはサマーセット諸島と言われており、そこに残った者がアルトマーとして進化した。

最もアルドマー種に近いとされるが、定かではない。

自らを神々の末裔と考えており、傲慢な者が多く、エルフ絶対主義的考えを持つ者も多い。アルドメリ自治領の統治機構『サルモール』を、中心的に構成する人種も、このアルトマーである。

しかし、正義感や使命感に燃える者も多く、賢者として帝国を永く支えてきた者が多

いのも事実である。

・ダンマー（ダークエルフ）

灰色に近い黒い肌を持つエルフ。

火の魔法の扱いに長けている。

元はチャイマーと呼ばれる種族であったが、ある者がアズラと呼ばれるデイドラ神を裏切った結果、呪いをかけられて現在の姿になったと言われる。

祖先信仰の他、デイドラ神を信仰しており、人の神を嫌っている。

モロウインド地方に住み、爬虫類のような種族アルゴニアンを奴隸としていたが、巨大火山レッドマウンテンが噴火した際に攻め込まれ、逆に追い出されるなどして、多くは避難民となった。

気性が荒く扱いにくい性格の者が多いため、主な避難先のスカイリムでは偏見が多いこともあつて鼻摘まみ者として扱われていることが多い。

しかし、実は人情深く義理堅い者が多く、仲良くなると扱いがかなり変わる。

・ボスマー（ウッドエルフ）

文明を嫌ってヴァレンウッド地方の森に住む。

基本的には肉食であり、信仰のために草食を禁じている。その信仰は堅く、飢餓状態では草食を避ける為、共食いをすることさえある。

狩りを生業とする者が多く、森の神の加護により動物を扱うのが上手い。また、毒に高い耐性を持つ。

明るい者も多いが、偏屈でエルフ的な高慢さを持つ者も多く、粗野な者もいたり変人が多い。

・オルシマー（オーク）

緑の肌に猪の様な牙、筋骨隆々の姿。

魔法に長けたエルフでありながら、全種族で最も強靱な肉体を持ち、最も近接戦闘に優れる。

元はこの様な姿ではなかったが、ある時、信仰していた強力なエイドラ神トリニマツクが、デイドラ神ボエシアと戦い敗北し、食われてしまう。その後、う○ことして排出されたところ、デイドラ神マラキヤスへと変貌してしまった。

その際に彼の神を信仰していた彼らも、現在の醜い姿に変貌してしまったと言われる。その姿故に迫害を受け続ける非業の一族である。

主にハイロツク地方のオルシニウムと呼ばれる山間に住む民族であり、族長を中心にした規模の小さく、閉鎖的な集落を形成している。

しかし自立観念が強く、集落の外に出て自らの人生を歩む者も多い。

・ドゥーマー（ドワーフ）

ある時種族ごと消え失せた謎のエルフ。

その研究が神の禁忌の領域まで及んだために消されたなどとも言われるが、原因は不明である。地下や山間に集落を形成していたと思われる。

かなりの科学力を誇っていたようで、優れた機械文明で、タムリエルの文明水準からすれば明らかかなオーバーテクノロジーの物品を作り出している。世界観に合わない物はだいたい彼らの産物として説明しておけば良いという創作者に優しい便利な存在。

その癖、スカイリムのノルドに戦争で敗北しているなど、過大評価は良くないのかもしれない。

巨大ロボ『ヌミデイウム』などロマン溢れる物を作り出しているが、後述のスノーエルフの扱いのように、道徳的面は他と大差ないというか、寧ろ残虐で倫理観も欠けていたものと思われる。

・ファルマー（スノーエルフ）

真つ白な肌と髪を持ち、寒さへの耐性があつた。

元はスカイリムに住んでいたが、入植してきた人間の繁殖力を恐れ、ほぼ皆殺しにしたが、生き残った人の長イスグラモルが、北のアトモーラ大陸から呼び寄せた援軍により復讐され、スカイリムの地を追われた。…と言われるが、実は人が地下から発見したとある強大な神のアーティファクトを巡る戦争に破れたとする説も。



やむなく地下に住むドゥーマーに助けを求めたが、迫害され拷問を受けた挙句、実験動物のように扱われた結果、知性や視力を失った、残忍なモンスターと変貌してしまつた。

誤訳なのが、彼らはファルメルとされているが、元のファルマーと区別する意味では有用なので、今作では怪物となつた成れの果ての彼らをファルメルと、元の姿をファルマー（またはスノーエルフ）として扱うことにします。

・アイレイド（ワイルドエルフ）

古代に特にシロデール地方を支配していたと言われる種族。

肌の色はアルトマーよりは暗く、ダンマーよりは明るかつらしい。

アイレイドの遺跡は今もシロデールに多く残っている。

デイドラ神を信仰していたようで、残酷な行いを多くしており、インペリアル<sup>1</sup>の祖先やブレトンの祖先を奴隷として痛ぶっていた。

ある時、時の竜神アカトシユに加護を受けた聖アレシツアにより人が蜂起して、支配層のアイレイドは倒された。

その時に打ち立てられた国こそが、現在の人による帝国の起源である。

この時、反デイドラ主義者などのアイレイド諸侯も人に味方したと伝わるが、やがて彼らも迫害されるようになり、国を追われ、だんだんと数を減らしていき、千年以上を

かけて絶滅したと言われている。しかし、実は極少数生きているとも。

シロディールの帝都、インペリアル・シティは元は彼らの都であり、その中心の白金の塔は、サマーセット諸島のクリスタル・タワーを模して彼らが作ったものである。

星から降り注ぐ魔力（マジカ）を利用する方法などを知っていたようだが、現在は殆ど失われている。

帝国のとある魔術機関が対アルドメリのためにそれらの方法を復活させようとしている節がある。（と筆者は見ている。）

――

### 獣人種（ビースト・レース）

人やエルフとは明らかに消化器や代謝の構造などが異なり、その他の肉体的特徴の差異からこのように呼ばれる種族たち。主にはカジートやアルゴニアンがいるが、イムガとも言われる猿人もいる。

これらの人々との人やエルフの交配は確認されていないため不可能とも言われるが、しかしこのような子供が生まれた場合は忌まれ隠されるため発見のしようがないのだとも。

## ＞カジート

亜人、獣人の中でも、猫のような姿をしている種族のことを言う。

麻薬の原料となるムーンシユガーという調味料を好んでいる。しかし、カジートは耐性が強いようである。

多くはエルスウェア地方に住んでいるようだが、世界中を旅して行商などをしている者も少なくない。

現在、エルスウェアはアルドメリ自治領に組み込まれており、動きが俊敏な彼らは斥候やスパイとして活用されていることが多い。

気ままで飄々とした者が多く、また、窃盗などに手を染める者も多い。

あまり知られていないが、実は結構多様な種族である。以下で紹介する以外にもあるようだが、筆者の勉強不足で不明点も多い。

生まれた日の月の状態などで、生まれてくる姿に差があるらしい。また、住む地域により毛並みなどにも変化があるようだ。

種族名の後に、○○・ラートと付く種がいる。

基本的に普通種より体躯が大きかったりするだけでほぼ同特徴を持った種である。

・シユセイ

スカイリム原作中では、基本的にカジートⅡシユセイであると思われる。

猫の顔に毛皮、尻尾や耳を持った人間という感じ。

ラート種は少し背が大きい程度であるらしい。

・オームス

かなり人間に近い外見をしているらしい。

おそらくはネコミミで尻尾なニャーンであるのではないか、というロマン溢れる存在。

皇帝直轄部隊ブレイズや、伝説の武人、ガイデン・シンジの名を勘違いした日本風にするよりは、よりシリーズに日本人ファンを引き込めたであろう存在。

どうして彼らが登場しないんだ。

どうして彼らが登場しないんだ。

実は第1作アリーナのうっぼいカジートは彼らだったらしい。外交官などとして活躍している者もいるようだ。

そして見た目はほぼ完全に人間である。きつと耳が生えていたり尻尾がある者もいるのだと筆者は信じている。やはり彼らの再登場こそが最も待ち望まれると言える。

ラート種は少し獣人的で、軽い毛皮や尻尾があるらしい。

・アルフイク

ただの猫。……と言われると凄く怒るらしい。

しつかり知性があり、魔法も使えるようだ。

その見た目などから抱きしめられるなど愛玩動物のような扱いを受けることが多いらしいが、それをされることを忌み嫌っている。そのような理由から滅多にエルスウェアの外に出ないようだが、しかしその特性を活かしスパイとして活動することもあるようだ。

基本的に服を着るが自分では着られない。

ラート種はおそらく普通種より大きいこと以外は知られていないようだ。

・キヤセイ

シユセイ・ラートよりさらに大きく強いらしい。

最も違う部分は足が人間のようになっていてることのようだ。

ラート種は毛皮の種類が豊富で、またウェアウルフより機敏であるとされる。また男性のアレが少し特徴的？らしい。

・ダギ

希少な種であるようで、エルスウェアの湿地帯や密林地帯に住むようだ。背が低く軽いため、高い木々の上を巧みに移動し、そこに住んだりしているようだ。

ラート種は魔法的才能に優れるという噂もあるが、普通種のように高い木の上に住むより地上の森林部を好むようだ。

・パーマー

二足歩行の虎のような感じで、背が高くおそらく屈強な戦士と予想される。  
ラート種は最強のカジートとされ、パーマーよりさらに大きく強いようだ。

・センシュ

巨躯な猫科動物という見た目で時に乗り物になつてくれるらしいが、アルフィクなどと同様にしつかり知性がある。言葉もおそらく話す？と思われる。

ラート種は普通種より遅いぶんさらに大きい。かなり戦闘力があるようで、流暢に話しさらに呪文も扱うようだ。乗り物となつてくれる場合も、乗り手と対等と考え家畜のように扱われるのを嫌う。らしい。

・トウジャイ

あまり知られていなく、沼地やジャングルに住むらしい。二足歩行であることは確か  
なようだ。

ラート種に関しても同様。

・メイン（たてがみ）

たてがみとも呼ばれる。カジートの伝統では世にただ一人とされ、双子月マツサー・セグンダが同時に日食を起こしたときに生まれるとされる。

歴史上のたてがみは全て同じ魂の者とされているようで、同じメイン種の中で争つた

というような記録もないらしいとか何とか。

つまり生まれながらのカジートの王や貴種のようなものと考えられるが、やはりよくわからない。

### >アルゴニアン

爬虫類のような亜人。いわば人型のトカゲ。

毒と病気が蔓延しているブラックマーシユ地方に住んでいるため、あらゆる毒や細菌に耐性を持つ。また、エラ呼吸により水中で活動もできる。

気質は知的で思慮深く、あまり他人を信用しない。しかし、一度信頼した友の為ならば死をも厭わない。

ヒストと呼ばれる謎の樹木を信仰しており、この樹木の蜜を舐めることなどで、見た目や性別が変わるとする説もあるが、定かではない。

彼らの耐性の強さは、そのまま劣悪な環境で働く適正となり、理想的な奴隷として、特にモロウインド地方のダンマー（ダークエルフ）に使役されていた。奴隷解放後も恨みは覚えており、現在は逆にモロウインド地方に攻め込んで南部の大部分を支配している。

彼らの性質を理解したくば、ゲーム中書籍『アルゴニアンの侍女』を読むべきだろう。

## 第8話「リバーウッド」

二人がリバー・ウッドの村の門の前にたどり着いたのは、昼を過ぎ太陽が南中を過ぎ  
てからであった。

川のほとりにあるこの村は、狩人や木こりが多く住んでいるようで、やはり木造建築  
が目立つ集落だった。

「やっとなつたわね！」

「静かにしろと言っただろうが」

ノアが喜んでいると、エドアードはぶっきらぼうに言った。

「わ、わかつてるわよ……」

しゅん、とするノアをよそに、エドアードは門の方へと向かっていく。

村に着く前、ノアはエドアードに、一つの言いつけをされていた。

『お前はエルフだから、必ず自立たないようにしろ。口を開くのも最低限にして、俺の名  
前も口にするな』

そう言って、エドアードはマントに付いたフードを目深く被って顔を隠した。



サルモールの追っ手を気にしてのことなのだろう。

……しかし自分は顔を丸出しなのに、エドアードがこれでは、むしろ目立ってしまうのでないだろうか？

フードを目深く被るエドアードは、見るからに不気味に見えるし、まるで自分の存在を知られることを忌避しているようだ。

ノアはそう訝しんでいたが、あまり深くは考えないことにして、エドアードの後に続く。

ー

「止まれ。ここはリバー・ウツドの村だ。北に向かう旅人か？」

エドアードが門の前に立つと、衛兵に呼び止められる。

衛兵は、馬の紋章が描かれた盾と軽鎧を持ち、腰には剣を差していた。馬の紋章はホワイトランを象徴する。つまり、この衛兵達はホワイトランの街から派遣されてきた正規の衛兵ということになる。

エドアードは心の中で軽く舌打ちをつく。

……普段は門衛は村の者が担っていて、大して呼び止められることはないのだが。

おそらく、内戦で起きるであろう小競り合いや治安悪化に備え、ホワイトランの境に位置するこの村に人員が派遣されたのだろう。

「怪しい奴め……答えろ！何の目的で来た！」

そんなことを考えていると、衛兵は痺れを切らし、声を荒げた。  
目深くフードを被った格好も裏目になった。

（……しようがない、か。）

「ああ、すまない。ホワイトランに向かう旅の途中なんだ。長旅で疲れていてな、村の宿に一晩泊めてもらいたいんだ」

エドアードはフードを取ると、努めて明るい声を作って言った。

「……そんなエルフの子供を連れての旅か？」

と、そこでノアに目が行ったのか、衛兵は訝しげな目で見る。

「この子は巡礼者だ。シロディールのさる商家の令嬢だな。俺はこの子の家に仕える用心棒だ」

エドアードは、あらかじめ作っておいた言い訳を淀みなく告げる。

帝国がアルドメリ自治領と仲が悪いとはいえ、多様性のあるシロディールにはエルフの金持ちも多くいるので、そう大きな疑問も与えないだろう。

「……はい。九大神様に祈りを捧げるには、スカイリムを旅するしかありません。どう

か村への逗留をお許しください」

ノアもそれに合わせるように、しずしずとした所作で頭を下げる。かなり堂に行つた演技で、ノアの可憐さはもちろん、巡礼服ではないものの貴族のように高そうなコートを着ていることや、そして皮肉にもサルモールの与えた教養が令嬢らしさに大きな説得力を与えた。

「ふ、ふむ……敬虔なお嬢さんだ。ただのエルフとは違うようだ」

ノアが機転を利かし、九大神と言つたのも良かったようだ。サルモールの人間ならば、口が裂けても九大神とは言わないだろう。それに工作員にそもそもこんなエルフの少女は使われない。

しかしこの機転といい、この前のドラウグルとの戦いといい、肝が座っているものと、少し感心していると。

「よし、わかつた。村へ入るのを許可する。この村には前々からポズマー（ウッドエルフ）が住んでいるらしいから、そう偏見もないだろう。だが、くれぐれも問題は起こすなよ?。」

衛兵が村への入場許可をくれた。

エドアード達は、少しホツとしながら門をくぐる。が――

「……………ふ、俺にはわかつていぞ」

「――」

そこで、衛兵がエドアードを呼び止めるように言った。

ノアはそれに気がつかず、先に行ってしまう。

ぴくりと、腕が背の大剣に伸びかける。しかし力づくは得策ではないと思ひ直した。サルモールと帝国を敵に回した以上、ホワイトランの衛兵を切れば本当にスカイリムに居場所がなくなる。

（まさか、ここまで手が回されていたのか？ ホワイトランがサルモールを受け入れたなどという話は聞かなかったが……こうなったら、もう村の連中に話をつけて貰うしか――……いや）

そこで、エドアードの心に、スツと冷たいものが流れた気がした。

――ノアなど捨てて、一人で引き返してしまえばいいのではないか？

頭の中に、ふと、そんな考えがよぎった。

まだ名は名乗っていない。顔を見られたのも余所者の衛兵だけだ。ここで踵を返せば、ノアを置いていけば、自分には大した追っ手もかからないのではないかと。

そもそも、助けてやっただけで十分だろう？ 何故自分がここまでやってやらねばならないのだ。

どうせあの子は死ぬ。野垂れ死ぬ。このスカイリムで、天涯孤独のエルフの少女が生

きていけるわけがない。そうならなくとも、あの美しい容姿が物乞いになることさえ許さない。好きモノの慰み者や娼婦に身を落とすのが良いところだろう。

それに、ここに自分は来たくはなかったのだ。

未だ何も成していない。それなのに、旅が始まったこの地を踏むことなど、許されぬ気がしたのだ。

だから、唐突にこんな、冷徹な思いに支配されかけているのだろうか。

(……………いや、違うな)

そこで、エドアードは心の中で、少し自嘲するように笑う。

自分は、単に辛いだけなのだ。

身勝手に飛び出したこの場所が、省みなかったものを突きつけてくるようで、常に非難してくるようで。

さつさと離れたい、本当にその一心なのだ。

「ふふ、まあそう固くなるな」

と、そこで衛兵が、馴れ馴れしげにエドアードの肩にもたれかかって来たところで、埠のあかぬ思考の世界から現実へと引き戻される。

門番の衛兵は、人の良さそうな顔で、唇を釣り上げ笑っていた。

「よくある話だ。巡礼者とその従者を装っての逃亡なんてのはなあ」

やはりそうか。

どこからどう読み取ったのか、それともサルモールが何らかの手を回したのか、この衛兵は自分達の事情を知っているのだ。

こうなれば、やはり強行突破しかあるまい。一応、義理だけは果たしてやろう。極力殺さぬようにすれば、何とかなるだろう。

そう思つて、今度こそ剣に手を掛けようとしたのだが――

「ふふ、商家の令嬢と従者が、手に手を取つての逃避行か。エルフとノルドでも、男と女ということかね？」

「……」

「ん？ああ、安心しろ。イスミールの髭にかけて、追つ手が来ても突っぱねて追い返してやろう。まあ、その武具を見れば、苦勞もあつたようだからな」

……どうやら、この衛兵は妄想力が逞しいタイプの子孫であつたらしい。

エドアードは、途端に力抜けるような、バカバカしい気持ちになる。

「……いや、そうじゃ――」

「しかしまあ、綺麗に育ちそうなのはわかるが、いくら何でももう少し待つてからにするべきじゃなかったのか？ 2、3年もしたら、きっとデイベラも嫉妬するような美女に――」

「……いや、そうか、そうだな。待てない事情があつたんだな？ そうなんだな？」

「だから、少し話を——」

「いや、みなまで言うな！ 言わなくていい！ いいんだ！ まあ、頑張れよ！」

そうして、ポンポンつと肩を叩いて指を立てると、衛兵はエドアードを通した。

「……」

門を通されたエドアードは、暫くそこで立ち尽くしていた。

エドアードが付いてこないことに気がついたノアも、何をしてるんだというふうにごちらを見ていた。

……別に、悪い勘違いではなかった。

これで、追っ手に関しては、かなり心配がなくなったのだから。

あの衛兵も、性質の良い人間なのだろう。エドアード達は助けられたのだ。

しかし、エドアードは物凄く納得の出来ない思いに苛まれていた。

そして、変な噂が広まる前に、絶対にこの村を出て行こうと決意したのであった。

自らの名譽のために。

——

二人は寄り道することなく、まっすぐ宿屋「スリーピング・ジャイアント」にやって来ていた。

「エルフが、ここに何の用かしら？」

宿に入るなり、いきなりだった。

宿の女主人らしき人物が、二人を見るなり言ったのだ。

女主人は、だいたい50歳程度だろうか。金髪を前髪ごとキツく後ろに縛って、如何にも気難しそうな顔をしていた。

「デルフィン、宿屋の主人が旅人に吐く第一声ではないだろうか？」

「オーグナー、余所者を把握するのは私の仕事よ」

カウンターの方から、オーグナーと呼ばれる店番らしき男性がやってきて諫めたが、女主人——デルフィンは、キツイ口調で返した。

ノアは内心ムツとしたが、先ほどのようにしずしずとした態度で、エドアードと打ち合わせた演技をする。

「九大神への巡礼の旅で、スカイリムにやってきました。どうか一晩泊めていただけませんか？」



「……ふうん、サルモールのエルフ共とは違うってことね」

すると、デルフィンの目から少し険が消えた。いや、なぜかノアにはホツとしたようにも見えた。エルフというだけで、そこまで警戒されるものなのだろうか。

しかしやはり、スカイリムの地でタロスへの敬意を示すのは特別な意味があるのだろう。

いや、エルフであるノアがそうすることに意味があるのか。

ノアは施された教育のおかげで、タロスがどういった存在か知らない訳ではなかった。

数百年前にも存在したというアルドメリ自治領を打倒し、征服した皇帝こそがタロスなのだ。

エルフ——特にアルトマーにとって彼は忸怩たる存在なのだろう。

しかし、ノアにはタロスを讃えてみせることなど全く抵抗はない。

むしろノアにとっては母と引き離れたアルドメリとサルモールこそが憎くてしょうがない。奴らに捕まっていた頃は、タロスⅡタイバー・セプティムの名が出るたび、奴らが顔をしかめていたのが面白かつたくらいだ。

「ここがあなた達の部屋の部屋よ。くれぐれも、騒ぎは起こさないことね」

デルフィンは二人を部屋に案内すると、さっさと扉を閉めて行ってしまった。

「感じの悪い人ね。悪い人ってわけじゃなさそうだけど……」

「……あんな奴、いなかったんだがな」

「え？ どういう意味？」

「何でもない。明日は夜明け前には動き始めるから、今のうちにさっさと寝てろ」

そうぶつきらぼうに言って、エドワードは椅子に座ると、武具を外して手入れを始める。ノアはその言い様に、少し頬を膨らませる。

「でも、ノルドの男の人って、いつもお酒飲んでるのね！ エドも飲んできたら!?」

先ほどデルフィン達と話している横では、酒臭い酔っ払いたちが騒いでいて、吟遊詩人らしき男の下手な歌に野次を飛ばしていた。

思えばヘルゲンも酔っ払いだらけだった。

「……あれ？」

と、そこでノアはあることに気がつく。

「……この部屋、ベッドが一つしかないの!?？」

この部屋、結構広いのだが、ダブルサイズのベッドが一つあるだけだ。

ノアは顔を真っ赤にして叫んだ。

「おい」

エドアードは、いい加減黙れとでも言うようにノアを見る。

「だ、だって……」

エドアードはこの村に来てから気が立っているのか、また口を開こうとしたノアを睨みつける。

ノアはまたしゅんとして黙ってしまふ。

キツク言い過ぎたのか、ノアはベッドの淵に腰掛けて、すっかり沈んだ様子になる。部屋の中には重苦しい雰囲気横たわる。

やがてそれに耐えかねたように、エドアードがチツと舌打ちをついて言った。

「ベッドはお前が使えばいい。俺はここで寝る」

「でも、そうしたらエドが……」

ノアは気が咎めたように言うが、エドアードは大剣を手に取ると、それを眺めながら言った。

「いや、今夜は忙しくなるかもしれないからな。だから、お前も早めに寝てろ」

「それって、どういう……?」

ノアは首をかしげて言ったが、エドアードは再び剣を壁に立てかけると、腕を組んで

目を瞑ってしまった。

(……いっつも、こんな感じ。ぶっきらぼうなんてもんじゃないわ)

ノアはため息をついて、言う通りにさっさと寝支度にかかることにした。

## 第9話 「夜襲」

——深夜。

川のほとりの村、リバーウッドの宿屋『スリーピング・ジャイアント』。

各部屋への入り口に繋がる広間。皆が寝静まり、火の立ち消えた暖炉の前を、黒衣の男が数人、足音を殺し歩く。

そして、一つの扉の前で足を止めた。

——ギイ、と先頭のアルトマーの男が軽く扉を開けると、後ろに向けてハンドサインのようなものを出し、コクリと頷く。そして……

ドゴオ!!という音と共に、先頭のアルトマーの男が扉ごと吹き飛んだ。

「な、なに!?」

男たちは、驚愕の色に顔を染める。

縦に振り下ろされた鉄塊、それを手に取るのは、闇に溶けるような暗色のマントと重鎧を身に纏い、獐猛な笑みを浮かべる男——エドアードだ。

「なんだ、そろそろ来る頃かとは思ってたが。お前らだけか?」

長大な大剣を肩に担いで、エドアードが部屋から一步外に出ると、男たちも気圧され

たように、一步、二歩と後ろに下がる。

そのあたりで、出入り口のところから、綺麗な金色の髪が顔を覗かせる。

「ほ、ほんとに来た……」

言われた通り、早めから眠っていたノアは、0時前にはエドアードに起こされていた。夜襲の可能性を伝えられ、半信半疑ながらも、用心に越したことはないと早めに出発の準備を整えていたのだ。もしも安心して寝入っていたら、無事でなかったに違いない。

「でも、これどうするの？こんなに壊しちゃって、弁償しなくちゃ……」

「下がってろ。悪いと思うなら、お前の手持ちから出しとくんだな。カウンターに金貨の一枚でも置いとキや、迷惑料としては十分だろ」

「もうっ！あなたたつて乱暴よー！」

その会話で、暗殺者達は我に帰ったようになる。

「貴様、その後ろの少女を引き渡せ。そうすれば命だけは助けてやる」

暗殺者らしい冷たい声で告げてくるが、エドアードは全く慌てることなく、彼らを一一人指差しでした。

「1、2、3……いや、そこに伸びてるの含めて4人か」

「……？」

唐突なエドアードの行動に、男達は若干戸惑う。

「貴様、何を——」

「……いや、桁が、一つ二つ足りてねえんじゃないかって思ってたな？」

空気が、途端に緊張を帯びる。

男達から、あからさまな殺気が噴き出したのだ。

「舐めるなよ、下等種が」

すぐさま、男達は短剣を抜いてエドアードに襲いかかる。得物が短く軽い分、数と俊敏さで上回るのだと言わんばかりに、三方から攻めかけた。

だが——彼らは見誤っていた。

ゴウツ！

再び鉄塊が振り回される。

「なっ——はや、」

「ヒッ——」

間抜けな声が出かけた瞬間、彼らは既に宙を舞っていた。

そう、彼らは見誤ったのだ。

エドアードの剣速は、彼らが接近し短剣を振り下ろすより、遥かに速かった。

「ゴフツ!!」

男達はキリモミしながら、床に叩きつけられた。

「こ、殺しちゃったの……？」

ノアは恐る恐る部屋から出てくると、男達の様子を伺う。

「……あ、生きてる」

男達はピクピクと痙攣していた。ところどころ変な風に曲がっていたが、息はあった。ノアは少しホツとする。エドアードは、最初と同じように、横っ腹で殴ったのだ。

「じゃ、早く行きましょう！」

カウンターに金貨を一枚置いておくと、ノアはバックバックを背負って意気揚々と言った。

「いや、念のためこいつらは縛ってから行く」

「あ、そっか。目が覚めたら暴れるかもしれないものね」

エドアードはあたりを見回して、縄の代用になりそうなものを探し始めるが……

「その必要はないわ」

「——ッ！」

響いた声に、エドアード達は咄嗟に振り返る。暖炉の前に置かれた椅子に、腰掛けて



いる者がいた。

「殺さないなんて、見た目と違って、ボウヤのように甘いのね」

金髪をキツめに後ろで纏めた女——デルフィンだ。いつからそこにいたのか、彼女は足を組んで、見下すようにエドアード達を見ていた。

やがて立ち上がると、腰に差した剣——反りの入った美術品のような曲刀——アカヴィリ刀を抜いて、二人の方へと歩いてくる。

エドアードは、警戒するように大剣を構え直す。おそらくは、デルフィンも先ほどの圧倒的な一撃を目にしているだろうが、少しも臆することなく歩みを進めてくる。そして——

「安心してちょうだい。敵対の意思はないわ」

ザクリと、刀を床に転がる男に突き刺して言った。ノアが小さな悲鳴を上げかけて飲み込む。

「こいつらは、殺しておかなきや何処までも追ってくるわ。一度敵対したのなら、恨みを買いたくないなんて甘えは捨てなさい」

そう言つて、デルフィンは次々と暗殺者達にとどめを刺していく。その行為には全くの躊躇がない。

ノアは、それを忌避するように視線を逸らし目を瞑る。

「……あら、ホントに敵対するつもりはないんだけど？信じてもらえないのかしら？」

警戒を解かず、威圧感を放ち続けるエドワードに、デルフィンが言った。

「俺は、こいつらよりも、あんたが仕掛けてくると思ってたんだがな」

「酷い言い草ね？怪しいところがあつたかしら？」

「ああ、宿屋のババアにしちゃ、鍛え過ぎだ」

「……それは迂闊だったわね。でも、鍛えるのをやめる訳にはいかないのだけど。どうするべきかしら？」

二人のやり取りに、ノアは困惑を示す。

「ど、どういふことなの？」

「お嬢ちゃん、あなたの騎士様は、私のことをサルモールあたりがスカイリムにばら撒いた、スパイか何かと勘違いしていたのよ？だから私がこいつらにトドメを刺してるのを見て、凶りかねているの。……私が、本当は何者なのかをね」

そう言つて、デルフィンはニヤリと獰猛に笑う。吹き出す威圧感は、先ほどの暗殺者などとは比べ物にならない。得体の知れない女だが、只者ではない、それだけは確かだった。

「——まあ、安心なさい」

しかし、そこでデルフィンは、ふつと威圧感を消した。

「最初は私もあなた達を警戒していたのよ。でもこいつらに襲われるってことは、あなた達は私と同類ってことね」

「それは——」

「ええ、私もこいつらに追われる身ってわけ。ここにいるのも、村に何かしようって訳でも、誰かの手先って訳でもなく、身を隠すのに都合が良かっただけ。まあそれ以上は教えてあげる訳にはいかないけどね」

デルフィンは肩をすくめ言った。

さらに刀をしまったのを見て、エドアードもやつと剣を収めようとするが——。

「動くな！」

男の声が響く。

「キャツ！」

続いて、ノアが悲鳴を上げる。

二人が振り返ると、暗殺者——アルトマーの男が、ノアの首筋に短剣を突きつけていた。

「動くなよ……我々がここを出て行くまで、貴様らが一步でも動けば、この娘の命はない！」

エドアードは舌打ちをつく。

あれはエドアードが最初に吹き飛ばした男だ。デルフィンがトドメを刺したようだったので安心してはいたが、どうも浅かったらしい。

「あら、これは、私はどうしたらいいのかしら?」

「……おい、お前」

しかし自らの不始末にも関わらず、デルフィンはどこ吹く風という感じで再び剣を抜いた。

「私としては、ここでこの男に逃げられる方が不味いんだけど?それともあなたが何とかしてくれるわけ?」

(——この女、まさか。)

エドアードは再びデルフィンに鋭い視線を向ける。デルフィンはそれも軽く流し、一歩前に出る。

「貴様!動くなと言っているだろうが!」

男が再びノアの首筋に強く短剣を突きつけるが、やはりデルフィンは止まらない。

(——こうなったら、一か八かやるしかない。逆上させると危ないが、こいつらは、そう簡単にノアを殺しはしないはずだ)

エドアードはそう考えを決め、行動に移そうとするが——。

そこで、状況が動いた。

「舐め、ないでよ!!」

「ぎ——!!」

ノアが思いつきり男の腕に噛み付いたのだ。男は堪らず声を上げる。同時に、すぐさまエドアードは駆ける。

「ぐっ!」

暗殺者はノアを振り解き、咄嗟にその手に魔法を込める。パチパチと火花が爆ぜる音——雷撃の魔法だ。

「——があっ!!」

だが、エドアードの方が早かった。

振り下ろされた大剣が、男の肩口に深く食い込む。

吹き出す血、しかし両断には至らない。すぐ傍らにいるノアが視界に入り、全力で振り切ることができなかったのだ。

「ぐ……………ぐふっ!」

だが、その命を奪うには十分だった。

男は口から血を吹き出すと、ふらふらと後ずさりし始める。

「お……………のれ」

その手の中の魔法は消えていなかった。

男は視界が霞む中、エドアードに向けて、最後っ屁とばかりに手をかざすが——  
「がはっ!!」

そこで、再び大きく血を吹いた。

男の身体は力を失い、その瞳からは既に光が失われていた。そして、魔法が込められたままの手は大きく逸れて——

「——え？」

ノアの方に向けられた。

「っがああああ!!」

それを知覚した瞬間、エドアードが吠えた。メシメシと上腕筋が悲鳴をあげ、大剣は唸りを上げる。

ヴオツ!!!

恐ろしい音と共に血が舞い、飛び散った。

続けて鉄塊が叩きつけられた床が碎け、木っ端が舞う。

「エ、エド……う？」

ノアは尻餅をつきながらも、無事だった。

凄まじい一撃が、魔法ごとアルトマーの男を両断したのだ。

しかしノアの顔に浮かぶのは安堵の色などではない。

「はー、はー、はー」

大剣を床にめり込ませたまま、エドアードは肩で息をしていた。その顔は悪鬼羅刹のごとく恐ろしく、その光景スラックを目の当たりにしたノアは、礼を言うことも忘れ、顔を青くしてエドアードを見ていた。

——パチ、パチ、パチ。

そこで、乾いた音が響く。

「お見事よ。甘いだけではないようね」

デルフィンが手を叩いてエドアードを褒めた。

エドアードは殺気を滾らせたままの眼光で、ギロリと彼女を睨みつける。

「……お前、俺を試したな？」

そう、デルフィンは意図的に一人だけトドメを刺さなかったのだ。

おそらくは、エドアードの実力がサルモールから逃げ切れるものかを量るために。

彼女がどんな理由でサルモールに追われているのかはともかく、自らの存在を知ったエドアードがすぐ捕まってしまうようなら、自らの身も危うくなるだろう。だから暗殺者にノアを人質に取らせ、その対応力を見ようとしたのだ。それでノアやエドアードが死んだとしても、彼女にデメリットはない。

「何のことかしら？……まあ、それなりにサルモールから逃げ回ってくれそうってことは、はつきりしたわね」

デルフィンが肩を竦めて言う。

エドアードは、より鋭く彼女を睨みつけ、場は一触即発の空気を呈するが――。

「お、おい、デルフィン？こりやどいう状況だ……？サルモールの追っ手はやったのか？」

また、第三者がそこに現れた。店番の若い男、オーグナーだ。ランプを片手に奥から様子を伺うように出てきたのだ。

「オーグナー、引っ込んでいなさい」

「ひっ！そ、そこにいるのは、昼間の客か？……いや、待て。やっぱあんたには見覚えがあるぞ？」

デルフィンが鋭く言うが、

しかし、エドアードと目が合うと、オーグナーは何かに気がついたように、恐る恐る近づいてくる。

「……やっぱりだ！あんた、エドだ！エドアードだな？？6年前に飛び出したっきりの！はは、なんてこった！エドが帰って来やがった！」



やがて、オーグナーは喜色めいたように声を上げると、エドアードに親しげにしだした。

「……どう言うことかしら？」

デルフィンが訝しむように二人を見る。

ノアも青い顔のまま困惑していた。

そこで、エドアードは、ふう、とため息をついた。急速に緊張感が抜けていく。

「……久しぶりだな、オーグナー。木こりの家の息子が、宿屋の店番なんてやってるとは思ってたなかつたぜ」

ー

「この男が、この村人ですって？」

オーグナーの説明を受けたデルフィンが、訝しむような顔で言った。

「ああ、そうか。あんたは入れ違うようにこの村に来たから、知らないんだつたな。こいつは6年前に旅に出たつきりだつたんだ。しかし、昼間はフードを被つてたし、少し変わつててわからなかつたんだ。でも、すっかり生きてたんだな！」

馴れ馴れしげな様子で喜ぶオーグナーに、エドアードは少しやりにくそうだったもの

の、拒絶はしなかった。この辺りが故郷だと聞いていたノアも、その態度を見て、ここがそうなのだと何となく納得した。

「……それで、何でお前がこの女の宿で店番なんてしてる？こいつが何者なのかわかってるやつてるのか？」

「ああ、それは問題ないよ。俺が彼女に協力してるってだけだからな。宿屋を始めたのも、この村に来る奴を監視しやすいつてからだ。詳しいことは言えない契約だが、悪い奴じゃないつてのは保証する」

「……悪い奴じゃない、な。他の連中は知ってるのか？」

「何人かは知ってるよ。サルモールはみんな気に入らないからな、奴らに追われてるつて奴には、みんな優しいもんさ」

ノアには、エドアードが訝しみつつも、オーグナーの言葉に少し安心したように見えた。やはり多少なりとも、故郷の心配はしているのだろうか。

「しかし、お前までサルモールに追われてるつてのはどういうことだ？そんなエルフの子まで連れて」

「こいつがあいつらに追われてたのを、成り行きで助けたらこうなっただけだ」

「そうか、昔からお前は意外と面倒見が良かったもんな」

……面倒見が良い？

ノアは、その言葉に激しい違和感を覚えた。確かに状況だけ見れば、自分はかなり面倒を見られているのだが……。しかし、やっぱりあのぶつきらぼうなエドアードに、面倒見が良いという言葉は全く似合わないような気がした。

「……とにかく、そういう訳だ。俺たちは先を急ぐから、もう行くぞ。サルモールは、全員俺に返り討ちにあつたことにしとけば、お前らには迷惑はかからないだろう」

そのあたりで、エドアードが切り出した。デルフィン の 正体などは気になるが、オーグナーにはある程度の信用があるようだし、彼が大丈夫と言う以上あとは任せるのが良いのだろう。

デルフィンもそれで文句はないという感じだった。

……しかし、やはりエドアードはやりにくそうで、旧交を温めることもなく、まるで早く立ち去りたいという風にも見えた。

「それは良いんだが、せめてダルさんやアルヴオアさんくらいには挨拶して行かないのか？」

「……ああ、また今度な」

オーグナーに呼び止められたが、エドアードは踵を返した姿勢のまま、少し間をおいて答えた。

その『今度』は、いつのことになるのだろうか。

「サラちゃんや、爺さんのことは聞かないのか？」

「……」

「二人は、ホワイトランに引っ越してったよ。2年くらい前の話だ」

「……そうか」

エドアードの返事に、オーグナーは少しため息をつくとき、一度カウンターの方向に引っ込んで、取り出した何かをエドアード目掛けて放り投げた。

「ほら、お前んちの鍵だ。サラちゃんが俺に預けてったよ。お前がいつ帰って来ても良いようにってな」

それを綺麗に掴んだエドアードは、無言でそれを懐に収めた。

「これから行くんだろ？ ホワイトランに。なら、サラちゃん達には会ってけよ？ めっちゃくちや綺麗になつてるぜ」

「……考えとくよ」

そうして、エドアードは宿屋から出て行った。それ以上、後ろを省みることにはなかった。

ノアは少し戸惑いながら、オーグナーの方にペコリと一礼をしてから、それに続いた。

二人は無言で、夜明け前の誰もいない村を歩いていった。村は静かで、先ほどの騒動で起き出してきた者はいないようだった。

ノアの頭の中では、色々なことがぐるぐると回っていた。

アルトマーの暗殺者を斬った時の、エドアードの恐ろしい顔。ここが彼の故郷ということ。デルフィンという謎に包まれた女のこと。

しかしノアには何故か、それら以上に、サラという人物のことが無性に気になった。とても聞ける雰囲気ではなかったが。

やがて、エドアードは一軒の家の前で立ち止まった。

懐から先ほどの鍵を取り出すと、扉の鍵穴に挿した。

(……じゃあ、ここが、エドのおうちってこと?)

「何してるんだ。さっさと来い」

ノアが扉の前で立ち止まっていると、中に入っていたエドアードが、ぶつきらぼうに言った。

何故か少し緊張しつつ、ノアも続く。

中はごく普通の家屋という感じだった。大昔、ノアが母と暮らしていた家の雰囲気と似ていた。あれに比べれば、少しばかり広いが。

しかし、二人の他には誰の気配もなかった。

綺麗に整頓されているくせ、少し埃臭いのは、まるでこの場所だけが、時が止まってしまっているようだった。

——家族はいないのだろうか？

ふと、ノアはそんなことを思ったが、きつとぶつきらぼうなエドアードは、そんなことを聞いたところで答えてくれないのだろう。

エドアードは、いつかのようにこなれた感じで柵からランタンを取り出すと、火をつけた。

そのランタンを手に、エドアードは机の上を見る。伝言のような紙がいくつか置いてあった。

彼はそれを暫くジツと見つめ読んだ後、少し大事そうに懐へしまった。ノアは内容を覗きはしなかったものの、きつと、きつき言われていたサラという女性からの物だと察した。

(も、もしかして、奥さんとかかな?)

一瞬、そんな邪推をしたが、そこでふと気になることがあった。

（あれ？　そういえば、エドって何歳なんだろう？）

そういえば、今まで気にして来なかったことだ。人間は長生きなエルフと違って、ある程度成長してしまえば、あとは年齢と見た目が比例する。つまり、エドアードも見た目通りと考えるべきなのだろうが――。

しかし、エドアードはその辺り凄く微妙なのだ。おそらく、30ということはないだろう。だが、目つきの険しさや、人を寄せ付けない風貌のせいか、少し老け……大人っぽくも見える。20くらいと言われれば驚くだろう。

「わっ、きやー！」

そんなことを考えていると、2階に行っていたエドアードが戻って来て、バサリと、何かを投げて寄越してきた。

「これ……」

ペアルックというわけではないが、エドアードのと同じような、すっぽり身体を隠せるフード付きのローブだった。

「俺の……家族が、昔使ってたお古だ。やっぱりお前の格好は目立つから着とけ」

確かに、これなら風貌を隠すことができるし、コートの上から羽織っても違和感がないデザインだ。

「でも、いいの？」

「いいも何も、使う奴がいな物だから問題ない。他にもいる物があつたら持つて行け」  
そう不機嫌に言うのと、あちこちを物色して、バックバックに物を詰めていく。

ノアは何となくその行為に気が咎め、結局ローブ以外は、何も持つて行くことはなく、エドアードの家を後にした。

ー

エドアードの家を出ると、夜明けが近いのか、僅かに明るくなっていた。  
「待ちなさい」

二人が村を後にしようとしたところで、女の声のエドアード達を呼び止めた。デルフィンだ。

「何の用だ」

エドアードが、少し警戒したように立ち止まる。

「あなたがサルモールの暗殺部隊を全滅させた以上、次はもつと大きな戦闘部隊を寄越して、あなた達を狙ってくるでしょうね。大きな街にいるうちは狙ってくることは少ないでしょうけど、ホワイトランを出たら気をつけなさい」

「……どうい風吹き回しだ？」



まるで助言するようなデルフィンを、エドアードは睨みつける。

「別に？あなた達ができるだけ逃げ回ってくれた方が、私に目が向くことがなくなるでしょうからね」

「……ふん」

肩を竦めるデルフィンの横を通り抜けるように、エドアードは今度こそそ村を後にしようとする。ノアも少し戸惑いつつ、それに続こうとするが……

「サルモールは、今、内部である勢力が台頭してきているせいで、少しごたついた状態にあるようね」

その言葉に、エドアードはピクリと反応して、足を止める。

「……ある勢力？」

「サルモール狂信派。」

高慢なサルモールのエルフ共の中でも、さらに強硬にエルフ至上主義を掲げる一派よ。

その一派の司法高官が秘密裏にスカイリムへ何かを運んでいる、という情報が入ったのは一週間前。……そして、サルモールが一段と落ち着きを失ったのも、だいたいその直後」

——その運ばれていた『何か』とは、自分のことだ。

ノアは直感的にそう思った。しかしそんなことをわざわざ自分達に伝えてくるということは、このデルフィンという女も、そのことに気がついているということだ。いや、あるいは最初に自分達が宿を訪れた時から。

「……何であんたがそんなことを知ってる？」

「私には、独自の情報網があるってワケ。それに、これは餞別よ。次にあなた達に会える可能性は、まず少ないでしょうからね」

そう皮肉ると、デルフィンは村の方へと戻って行った。

エドワードはその背を見送ると、チツと舌打ちをついて、今度こそ踵を返した。ノアもそれに続いていく。

次の行き先は、ホワイトトランの街だ。

## ※世界観の紹介3 「『塔』と『石』、そして『踊り』」

> 『塔』と『石』、そして『踊り』

TESシリーズを深くプレイした人は思いあたることがあるかもしれませんが、タムリエル大陸の各地方には『塔』と呼ばれるものがいくつもあります。

例として、白金の塔だとか雪の塔（世界のノド）だとか真鍮の塔ですね。ドラゴンボーンの書の予言に特に見られます。

この『塔』には自然物と人口物があり、中にはおおよそ『塔』とは言いがたい形状のものもあって、なんだか特別そうな感じするなーって思った人も多いんじゃないでしょうか？

実はこの『塔』という言葉は、我々が素直に想像する建築物としての塔ではなくて、あの魔法的な装置のようなものを表す言葉なのです。

ですから形状自体には特別な意味がなく、『塔の魔法』と言った方がいいのかもしれない。

この魔法的装置としての『塔』は、基本的に世界創造の際に建築されたアダマンチンの塔を模しています。

アダマンチンの塔とは、世界創造の不完全な部分を補う装置で、放っておくと『拡散してしまふ現実』を繋ぎ止めるためのものと言われている、ムンダス（定命の次元そのもの、宇宙）の存在を支える屋台骨として、神々によって建造されたとも言われているものです。

世界各地の似た機能を持った装置は、これを魔法的に模しているが故に『塔』と呼ばれるようです。

聖アレツシアが人間の帝国（第一帝国）を建国する遙か以前、エルフたち（おそらくは原種アルドマー）はこの『アダマンチンの塔』の機能を模した、新たな『塔』を建築する技術を体系化しました。

これがエルフ分派（アルトマー、ポズマーなどへの枝分かれ）に繋がったとも言われている、彼らはそれぞれが各地に『塔』を建築、もしくは既に存在するものを利用しました。

『塔』を建築した分派したエルフたちは、その『塔』の機能を使って、それぞれが色々なことを始めました。

『塔』とは世界の在り方そのものへの干渉装置とも言えるので、その力を使えば『塔』の周辺の現実を、自分たちの望むように作り変えることができましたのです。

この世界改変とも言える行為を、『踊り（ダンス）』と呼びます。

もしかしたら、聞き覚えのある人も多いかもしれませんがね。

また、『塔』の建築には、その要であり核となる『石』が必要です。

例えばアダマンチンの塔には『ゼロの石』があつて、この石の能力のほとんどは万物を实体?として安定化させるための役割を果たすことに割かれていると言われています。

どの『塔』であれ、要となる『石』が失われれば、塔が世界に与えている効果が失われることとなります。

それが何を意味するかと言うと、歴史上で何度か『王者のアミュレット』が『白金の塔』から失われた時に起こったことを思えば分かりやすいでしょう。

世界の在り方や次元そのものへの悪影響は計り知れないことは確かです。

＞各地の塔と石

・アダマンチンの塔

またの名を、『アダ・マンティア』、『ディレニの塔』、『ゼロの塔』などとも呼ばれる。ハイロック地方のある島に建つ塔であり、世界創造の際に神々が会合を開いたとも言われる世界最古の建造物。

『石』は『ゼロの石』。

・レッドマウンテン

モロウインド地方のヴァーデンフェル島にある火山。『紅い塔』とも呼ばれる。

世界創造の際にエイドラを裏切ったロルカーンは、心臓を抉り出された。太陽神アーリエルはロルカーンの心臓を矢に括り放った。

その着弾地がレッドマウンテンとなったと言われている。故に『石』はロルカーンの心臓である。

すでに『石』は破壊されてしまったため、機能は失われていると思われる。

・世界のノド

『雪の塔』。

スカイリム地方の中央にそびえる世界最高峰。

『石』は『洞窟』と言われているが、少なくとも筆者にはどの洞窟のことかはわからないし、もしかしたら何か別のものを象徴的に『洞窟』としているのかもしれない。

・緑の大樹

ボズマーの育てるヴァレンウッド地方原産の巨木。それになる可能性の木の实バーチャンス・エイコーンという実がなり、これが『石』となった。ヴァレンウッドの森の至るところにあると言われている。

(※しかしアイレイドによって減らされ、現在はヴァレンウッド地方のグラール・ウッド地

域の街、エルデンルートにそびえるエルデンツリーのみと言われる?)

至るところにあった大樹は歩き歌い踊ったと伝わる。『踊らせる歌』を覚えたポズマー(ウッドエルフ)は、色々な望みの現実を作ることを楽しんだとも。

何となく彼らの森への信仰の一面が見えてくる気がしなくもない。

#### ・白金の塔

タムリエルにおいて『ゼロの塔』に次いで強力な塔であることから、『壺の塔』とも言われる。

八つの小さな塔に円状に囲まれており、これが他の塔とは違った力を与えている?

数千年前にシロデイル地方を支配していたアイレイド(ワイルドエルフ)によって建築されたとされている。

現在は人間たちの『帝国』の首都の中心となっている。

『石』はロルカーンの心臓から滴り落ちた血が宝石となった『チム・エル・アダバル』。これは後世に帝国の王権の象徴でもある『王者のアミュレット』として利用された。

3紀末のオブリビオン危機(第四作T E S 4オブリビオンのメインクエストエンディング)で王者のアミュレットが砕かれたため、現在は塔としての能力は失われていると思われる。

#### ・クリスタルタワー

サマーセット諸島のアルトマー（ハイエルフ）によって建築された。『原理の水晶塔』とも。

『石』はとある『人』と言われているらしいが、これが特定の人物なのか生贄という形で補充可能な人なのかは筆者にはわからない。（インペリアルライブラリー：2013年開発スタッフへのインタビュより）

esoにて石がお披露目された。人ではなく、『チム・エル・アダバル』にも似た真つ赤なクリスタル『透明なる法』（筆者訳）であった。ロルカーンとも考えられるが、他の何らかの神の心臓の血、または心臓そのものである可能性が考えられる。

『人』ではないのは設定の変更なのか、それともおそらくは魂石の一種であるこの石に封じられた『何か』を指しているのか。やはり不明点の多い石である。

3 紀末のオブリビオン危機（シリーズ4作目）の際に攻めてきたデイドラによって完全に破壊されてしまった。

・ヌミディウム

『真鍮の塔』。

ドゥーマー（ドワーフエルフ）の作り出した人造神、巨大ロボ。レッドマウンテンから持ち出したロルカーンの心臓を使用し、動力とした。おそらくこれが『石』だと思われる。



ロルカーンの心臓が失われてからは、とある人物を核としたトーテムが石となったと考えられる。

現在は破壊されている。

・オリハルク

大昔に沈んだヨクーダ大陸にあつたと伝わる。『石』は一振りの剣だったとも。

ヨクーダはラ・ガダ（レッドガードの祖先）の土地であると伝わるが、どうして古代エルフの産物である塔があるのかと謎であつたが、どうやらシニストラル・マー（左利きのエルフ？）というエルフも存在したようである。そして互いに争っていたとも。彼らはサマーセット南方の大陸に住むマオー・マーと関わりがあるとも言われる。

知られている『塔』はこの辺りがあります。

しかし他にもいくつかあるのが自然でしょうし、個人的には各地方に1つずつ、計9つは必ず大きなものがあると考えています。

1を中心にして8つに分かれた、というイベントは歴史上でいくつもありますし、それと『塔』の関係は考察すると興味深い気がしますね。

有名な『踊り』には、アレツシア会狂信派によつてアダマンチンの塔で行われたものがあります。これは『時の竜神アカトシユ』の在り方にまで手を出した結果、時間軸や

空間、物事の因果がメチャクチャになってしまふ、歴史上最大規模の『ドラゴンの突破』を引き起こし、1000と8年（と言われている）の間、世界を不安定な状態にしました。